
夏の終わりの静かな風

海田 陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の終わりの静かな風

【Nコード】

N4067C

【作者名】

海田 陽介

【あらすじ】

東京でアルバイトをしながら小説家を目指している僕は久しぶりに故郷の宮崎に帰ってくる。そこで偶然再会した友人や家族と会話を重ねながら、僕は改めて生きる意味や、これから将来のことを考えていく。僕が東京に戻る頃、夏の終わりの静かな風が吹き始めていて・・・。

偶然の再会

「吉田くんじゃない？」

ふいに背後から声をかけられた。

驚いて振り向くと、そこにはひとりの女性が立っていた。

年の頃は二十代半ばくらいだろうか。きれいな女の人だった。

知り合いだろうかと思つて僕は記憶の糸を手繰り寄せてみたのだけれど、どうしても思い出せなかった。それで僕が戸惑っていると「覚えてない？」

と、彼女は言った。

「ほら、高校のとき同じクラスだった。」

と、彼女は笑顔で続けた。

その彼女が出してくれたヒントのおかげで、ようやく僕は彼女のことを思い出すことができた。彼女の名前は狭山ゆかりで、高校のときのクラスメイトだ。

咄嗟に思い出すことができなかったのは、彼女が昔と違ってきれいに化粧をしているせいと、もともと僕と彼女が高校の頃特に親しい間柄だったわけでもないということがある。

顔を合わせれば話す程度の、そんな知り合い程度の仲だったのだ。それに考えてみれば、こうして彼女に会ったのも高校を卒業して以来だから、もう七年近くが経ってしまったということになる。僕が瞬時に彼女の顔を認識できなかったのも無理のない話だった。

「そっか。狭山さんだ。」

と、僕は思い出せなかったことを誤魔化すように曖昧に微笑んで言った。

「なにしてたの？」

と、彼女は言った。

僕は彼女の問いに、自分が手にしている漫画雑誌に視線を落とした。手にしていた本がたまたまエロ本等ではなくて良かったと安堵した。

「ちょっと立ち読み。今実家に帰ってきてるんだけど、家にいても何もすることがなくて。」

僕はいいわけするように答えた。僕は今帰省していて宮崎にいる。僕が今居る場所は、ここ、地元の日南では一番大きな本屋さんだ。

「そっか。」

と、彼女は納得したように軽く頷くと、それから、

「ねえ、久しぶりだし、今度ゆっくり話さない？」

と、笑顔で言った。

「今わたしバイト中でちょっと時間ないんだけど、明日とか、どう？」

「そっか。狭山さんここでバイトしてるんだ。」

僕は今更のように彼女が黒のエプロンを着ていることに気がついた。黒のエプロンはこの書店店員の制服だ。

「明日だね。べつにいいよ。特に用事もないし。」

今のところ僕には特に予定と呼べるほどのものは何もなかった。

「良かった。じゃあ、明日の一時にそのファミレスで待ち合わせでいい？」

彼女は窓の外を指差して言った。

窓の外にはジョイフルというファミリーレストランがある。

「うん、それでいいよ。」

と、僕は手にしていた漫画雑誌をもとの棚に戻しながら言った。

「じゃあ、明日の一時に。そのファミレスで。」

彼女は微笑んで言った。

了解、と僕は答えた。

じゃあ、またねと言って、彼女は僕に背を向けて歩いていった。

僕は去っていく彼女の後姿をなんとなく少しの間ぼんやりと眺めていた。

僕たちの日常の、なんでもないこと 1

翌日、狭山さんは予定通りの時間にやってきた。

僕たちは若い女の子ウエイトレスに一番奥の窓際の席に通されて、向かい合わせに腰かけた。

平日の午後のファミリーストランは空いていた。四十代前半から後半くらいの女のひとたちが何組か散らばって席についているだけだった。

窓の外には国道が走り、その国道を挟んだ向かい側には狭山さんが働いている本屋さんが見えた。その本屋さんの隣には信用金庫のビルがあり、その更にとなりは大きな駐車場のついたドラッグストアがある。田舎特有の特に飾り気のない、どちらかといえば地味な風景が窓の外には広がっていた。

僕たちはとりあえずという感じでドリンクバーを注文し、そのあと僕はハンバーグとライスのセットを注文し、彼女はだいぶ迷ってからカツカレーを注文した。

注文を取ったウエイトレスの女の子が厨房に戻っていくと、僕たちはドリンクバーに飲み物を汲みにいくためにそれぞれ席を立った。

僕はアイスコーヒーを汲んで席に戻り、彼女はアイスレモンティをグラスに汲んで席に着いた。

だけど、席についたのはいいものの、僕は咄嗟に何を話したらいいのかわからなかった。話題なんて探そうと思えばいくらでも見つかりそうな気がするのだけれど、変に緊張してしまって上手く言葉

がでてこなかった。

僕がそんなふう話題選びに戸惑っていると、狭山さんの方が逆に、

「吉田くんはいつこっちに帰ってきたの？」

と、僕に気を使って話しかけてきてくれた。

僕は狭山さんの問いにアイスコーヒーをストローで軽く口に含んでから、

「つい最近。八月の二十日とかそれくらいかな。」

と、答えた。

「そっか。ほんとについ最近だね。」

と、狭山さんは何が可笑しかったのか軽く微笑して僕の言葉に頷くと、ふと思い出したようにストローでアイスティーを口に含んだ。

それから狭山さんは頬杖をついて、窓の外に視線を向けると、何か考え事をするようにそのまま黙っていた。そして少し経ってから、
「だけでもう、夏、終っちゃうね。」

と、狭山さんは窓の外に視線を向けたまま言った。そう言った狭山さんの声は、どこか寂しそうにも感じられた。

「そうだね。」

と、僕は彼女の言葉に同意すると、彼女の視線の先を辿るように窓の外に目を向けた。さっきの彼女の言葉のせい、窓の外の日の光に照らされた世界は、夏本来の輝きをいくらか失いはじめているようにも思えた。

「わたしね。」

と、狭山さんは窓の外に視線を彷徨わせたままゆっくりとした口調で言った。

「一年の季節のなかで一番夏が好きなの。だから、その季節が終ってしまうのってなんだか寂しくて嫌なのよね。」

と、彼女はそう言と、僕の顔に視線を戻して、口元でいいわけするように微笑んだ。

「そういう気持ちってなんとなくわかる気がするけど。」

と、僕は狭山さんの科白に同意してから小さく微笑した。

「夏って暑くて嫌だなんて思うこともあるけど、でも、子供の頃の夏休みのイメージのせいかな、すごく楽しいことが待っているような、お祭りのような、そんなイメージがあつて、だから、その夏が終ってしまうと思うと、なんだかちよつと名残惜しいような気持ちになるかな。」

「うん。そう。そんな感じ。」

と、狭山さんは僕の意見に同意して微笑すると、またアイスティーを少し口に含んだ。僕もつられるようにして少しアイスコーヒーを飲んだ。

耳を澄ますと、店内のBGMに混ざって微かに蝉の鳴き声が聞こえた。それは残された最後の力を振り絞って鳴いているかのような、どこか夏の終わりを感じさせるものだった。

「そういえば吉田くんっていまどこに住んでるの？実家に帰ってきたっていうことは、宮崎には住んでないってことだね？」

と、狭山さんはふと思いついたように尋ねてきた。

「うん、今は東京に住んでるよ。」

と、僕は簡単に答えた。

「大学で東京に行ったんだけど、なんとなくそのまま。」

「そっか。」と、狭山さんは頷いてアイスティーを口に含むと、それから僕の顔を見て、

「東京では今何してるの？」

と、訊いてきた。

「サラリーマン？」

僕は彼女の問いに軽く首を振った。僕は東京でフリーターをしている。でも、僕は彼女の問いに正直に答えるのに多少の躊躇いを感じた。というのは、フリーターをしているということを話すと、大抵のひとが怪訝そうな顔つきをするからだ。だいたい決まって何故就職しないのとか、将来不安じゃないのかとかそういう話になるので、僕はなるべく自分がフリーターでいることを他人に話したくないという気持ちがあった。

でも、結局、僕は狭山さんに嘘をつくのが嫌だったので、正直に事実を話した。大学を卒業するときに就職しようかどうか悩んだのだけれど、結局就職しなかったこと。就職しなかったのは他にやりたいことがあったからなのだという事。

「そっか。じゃあ、吉田くんは夢を追いかけてるんだ。」

と、狭山さんは僕の顔を感じたように見つめて言った。

「いや、夢を追いかけてるとか、そんなカッコイイものじゃないよ。」

と、僕は苦笑して慌てて否定した。僕は自分の顔が赤らむのを感じた。

「それに、そのやりたいことじゃ、まだ全然結果出せてないしね。」

と、僕は少し眼差しを伏せるようにして続けて言った。

「・・・そっか。」

と、狭山さんは僕の科白にどう声をかけていいのかわからない様子で曖昧に頷くと、何秒間か間隔をあけてから、

「でも、まだ、そのやりたいことってというのは、続けてるんでしょ？」

と、励ますように続けて言った。

「・・・うん、まあ、一応ね。」

と、僕は歯切れ悪い答えを返した。

「じゃあ、いいんじゃない？まだまだこれからだよ。きつとなんとなるって。頑張って。継続は力なりだよ。」

狭山さんは優しい笑顔で言った。

「そうだね。ありがとう。」

僕は狭山さんの科白に少しぎこちなく微笑して答えた。

そして、僕がそう答え終わった頃に、僕と狭山さんが注文した料理がテーブルに運ばれてきた。

僕たちは一旦会話を中断すると、おのおのに料理を口に運んだ。口にした料理はいかにもファミリーストラン的な味がした。可もなく不可もなくといった感じ。

「ところで、吉田くんのそのやりたいことってなんなの？」

しばらくしてから、狭山さんはふと思い出したように尋ねてきた。

「いや、小説を書いてるんだよ。」

と、僕はちよつと恥ずかしかったけれど、正直に言った。

「へー。すごいね。」

と、狭山さんは意外な言葉を耳にしたように表情を輝かせて僕の顔を見つめた。

「いや、べつにすごくないよ。さっきも言ったけど、まだ全然結果とか出せたわけじゃないし。」

僕は苦笑して答えた。何だか狭山さんに誤解を与えてしまったようで申し訳ない気持ちになった。

「でも、わたし、小説を書いているっていつひとはじめてあったかも。」

狭山さんは楽しそうに微笑んで言った。そしてグラスに残っていたアイステイーを一息に飲み干してしまうと、
「わたしも結構本読むの好きだよ。」

と、狭山さんは明るい笑顔で続けて言った。

「どんなの読んでの？」

と、僕はなんとなく尋ねてみた。

すると、狭山さんは視線をやや斜め上にあげて思案するような表情を浮かべた。そして、少し経ってから、

「わりと何でも読む方だと思うけど、最近は石田衣良とか好きかな。あとは江国香織とか。」

と、考えながら話すようにゆっくりとした口調で答えた。

「石田衣良はそんなに読んだことないけど、東京ゲートウェストパルクとか書いてるひとだよね？」

と、僕は訊いてみた。すると、彼女は、

「そう。そう。」

と、微笑して頷いて、

「あれは面白かったかなあ。」

と、何か物語の余韻に浸るようにどこかつとりとした表情を浮かべた。

「あと、あのひと、他にも恋愛の話とかも書いてるんだけど、それも良かったよ。」

と、狭山さんはオススメしてくれた。

僕は微笑してまた今度読んでみるよと答えた。

「逆に吉田くんはどんなのが好きなの？小説家とか目指すくらいだから何か難しそうな読んでそうだよね。」

「いや、そんなこともないよ。」

と、僕は狭山さんの言葉に苦笑して答えた。

「僕もわりと普通なの読んでるよ。村上春樹とか吉本ばななとか。たまに夏目漱石とかの古い小説を読んだりすることもあるけど、基本的には古いものよりも最近のやつの方が好きかな。」

それから僕たちはお互いがこれまで読んできた本のことや好きな作家について話した。

僕たちの日常の、なんでもないこと 2

そして会話がひと段落すると、僕たちはもう一度飲み物を汲むために席を立った。

僕はコカコーラで、狭山さんはメロンソーダだった。あまり身体には良くなさそうだけれど、グラスのなかに入った彼女のメロンソーダは透き通ったきれいなエメラルドグリーンをしていた。それは僕に夏の思い出のようなものを連想させた。

「だけど、吉田くんっていつぐらいから小説を書き始めたの？高校のときって確か書いてなかったよね？」

と、狭山さんは汲んで来たばかりのメロンソーダを一口ストローで啜ってから不思議そうに言った。

「いや、実はもう高校の頃から書いてたよ。」

と、僕は微笑して答えた。

「ただ恥ずかしいものだから誰にも見せてなかったけど。」
「そっか。」

と、狭山さんは頷いてまたメロンソーダを少し飲むと、

「何が切っ掛けとかあったの？小説を書いてみようかなって。」

と、僕の顔を見て興味深そうに尋ねてきた。

「いや、なんとなくだよ。」

と、僕はいいわけするように微笑して答えた。

「高校生くらいのときって、ついつい色んなことを深刻に考えすぎちゃったりするでしょ。生きる意味とか、そういうの。それでそのとき自分が考えたことや思ったことを何かの形に纏めてみたいなんて思ってたんだよ。それが切っ掛けといえど切っ掛けかな。それに、高校のとき、従姉妹のお姉ちゃんがちょっと重い病気にかかったた

りして・・・だから、余計そういうことを考える機会が多かったっていうのもあるんだけど。」

「そっか。」

と、狭山さんは僕の言葉に頷くと、目線を落として少しの間何かを考えるように黙っていた。そしてしばらくしてから顔をあげると、

「その従姉妹のお姉ちゃんって何の病気だったの？」

と、遠慮がちに尋ねてきた。

「ちょっと重い肝臓の病気。」

と、僕は答えた。

「でも、なんとか無事回復して、今は福岡の方でピアノの先生してる。一時期、ほんとにちょっと危ない時期もあったから、何事もなくてほんとに良かったんだけど。」

「そっか。」

と、狭山さんは頷くと、また目線を落として何秒間の間黙っていた。眼差しを伏せた彼女の顔は少し哀しそうにも映った。

「実はね。」

と、少し経ってから彼女は再び顔を上げると、いくらか言いづらそうに口を開いた。

「わたしのお姉ちゃんも今ちょっと重い病気で入院してるの。」

と、狭山さんは唐突に言った。

僕は彼女の突然の言葉にどう答えたらいいのかわからなかった。それで黙っていた。狭山さんはまたメロンソーダを一口口に含むと、

「・・・お姉ちゃん癌なの。」

と、狭山さんはテーブルの上辺りに視線を落として少し小さな声

で言った。

僕は驚いて彼女の顔を見つめた。

「会社の健康診断ときに見つかって。でも、まだ早い段階で見つかったからたぶん大丈夫だと思うんだけどね・・・。」

と、狭山さんは半ば自分に言い聞かせるように言った。

「半年くらい前かな、癌の摘出手術をして。今は抗がん剤の治療で癌が再発しないようにしてるところなんだけど・・・。」

僕は彼女が口にしたあまりにも重い事実にしばらくの間適切な言葉を見つけることができなかった。そしてだいぶ経ってから、

「大変なんだね。」

と、何の慰めにも、励ましにもならない言葉を言った。

「・・・だけど、さっき吉田くんのお姉さんが奇跡的に回復したっていう話を聞いてちよつと勇気づけられたかな。」

と、狭山さんは顔を上げて僕の顔を見ると、口元でいくらか無理に微笑んで言った。

「狭山さんのお姉さんも無事回復するといいね。」

と、僕は言った。

狭山さんは黙って頷いた。

それから狭山さんはメロンソーダをストローで少し飲んだ。僕もコココーラを少し飲んだ。

僅かな沈黙があった。

「だけど、わたしもお姉ちゃんが病気になる一年前くらい前までは

東京に住んでたんだよ。」

と、しばらくしてから狭山さんは深刻になってしまった雰囲気を変えようとするように明るいい口調を装って言った。

「わたしも吉田くんと同じで大学で東京にいったの。そのあと就職してそのまま東京にいたんだけど・・・だから、そのせいか、東京にずっといたせいで宮崎弁ほとんど忘れちゃったの。」

狭山さんは微笑して言った。

「そうだよ。さっきから狭山さんってずっと標準語ばい喋り方だなって思ってたけど。」

「無理に話そうと思えば話せなくもないんだけどね。」

と、狭山さんは微笑していいわけするように言った。「でも、そうすると、すごく変な感じになっちゃうの。宮崎弁と標準語がごちゃ混ぜになっちゃうて。だから、最近はずっと標準語で通してるの。」

「べつに東京帰りを気取ってるのかそういうんじゃないんだよ。」

と、彼女は小さく笑って言った。

僕はわかっているというように微笑んだ。

「だけど、吉田くんも喋り方、なんか標準語ばいよね？やっぱりわたしと同じで長く東京にいたせいで宮崎弁忘れちゃとか、そんな感じ？」

僕は彼女の言葉に苦笑して首を振った。

「いや、僕の場合は喋るひとに影響されちゃうだけだよ。」

と、僕は微笑しながら答えた。「狭山さんが標準語で喋ってるからつついつられて標準語ばい喋り方になっちゃうてるけど、家では普通に宮崎弁で話してるよ。」

「なるほど。」

と、狭山さんは小さく微笑して頷くと、もう残り少なくなったメ

ロンソーダを飲み干した。

ウェイトレスがやってきて僕たちの食器を片付けていった。

狭山さんはウェイトレスの女の子が厨房に戻って行ってしまうと、「そういえば気になってたんだけど、吉田くんっていま東京のどのへんに住んでるの?」

と、尋ねてきた。

「吉祥寺からちょっと離れたところかな。」

と、僕は答えた。

すると、彼女の表情に笑顔が広がった。

「わたしも吉祥寺の近くに住んでたんだよ。」

と、狭山さんはいくらか声を弾ませて言った。

「そうなんだ。」

と、僕も声を弾ませて言った。狭山さんが吉祥寺に住んでいたということを知って、急に親近感を覚えて嬉しくなった。

それから僕たちはひとりしき吉祥寺についての話題で盛り上がった。吉祥寺という町が適度にかけていながらそれでいて緑豊かな場所であること。交通の便が良いこと。お互いが知っているカフェや雑貨屋さん等のことについて。

「・・・狭山さんが宮崎に戻ってきたのは、やっぱりお姉さんの病気が関係してるの?」

と、僕はひとしきり吉祥寺という町について狭山さんと語りあったあとで、ちょっと躊躇ってから尋ねてみた。そして訊いてしまっ
てから、やっぱりこういう質問はやめておくべきだったかな、と、僕は後悔した。というのは、僕がその質問をしたことで、狭山さんの顔からみるみる笑顔が失われていくのがわかったからだ。

「うん。だいたいそんなころかな。」

と、狭山さんは少しきこちなく口元で微笑んで答えた。

「わたしの家って、お母さんが早くに病気で死んじゃってて、お父さんとお姉ちゃんとおわたしの三人家族なの。」

と、狭山さんは軽く眼差しを伏せるようにして続けた。

「それで、お母さんが亡くなってからはお姉ちゃんがだいたい家のこととか面倒見てくれてたの。わたしとお姉ちゃんって七つも歳が離れてて、わたしにとってお姉ちゃんはお姉ちゃんっていうよりもお母さんみたいな存在だったんだけど・・・。」

僕は答えようがなかったので、ただ黙って狭山さんの話に耳を傾けていた。

「お姉ちゃんは宮崎の短大を卒業したあと、こっちで地元のスーパーに就職したの。わたしは大学で東京に行ったから、たまにしかこっちには戻ってこなくて・・・だから家のことはお姉ちゃんに任せっきりだったの・・・家のこととかお父さんのこととか。でも、さっきも話したけど、お姉ちゃん病気になっちゃったでしょ？だから、わたしが今度は宮崎に戻ってくることにしたの。家のこともあるけど、お姉ちゃんの看病とかもお父さんひとりじゃ大変だし。」

「・・・そっか。」

と、僕は頷いた。そしてそれから、

「何か余計なこと訊いちゃったみたいでごめん。」

と、僕は謝った。

「ううん。」

と、狭山さんは僕の言葉に口元で弱く微笑むと軽く首を振った。

しばらくの沈黙があった。

僕は何か話さなくちゃと思ったけれど、こんなとき何をどう言ったらいいのかわからなかった。沈黙のなかには店内に流れているBGMと食器の触れ合うと音と他のお客さんの話声が聞こえた。

いつの間にか蝉の鳴き声は聞こえなくなってしまうていた。

「・・・だけど、最近はこっちに戻ってきて良かったなあって思うこともあるかな。」

いくらか長い沈黙のあとで、狭山さんは口を開くとそう静かな口調で言った。

「こっちは東京と違って食べ物美味しいし、自然はたくさんあるし。それに、こっちに戻ってきたことで、家族と一緒に過ごす時間も増えたしね。・・・正直東京で会社勤めしてた頃は毎日毎日サービス残業の連続で疲れちゃってたし・・・だから、かえって良かったのかなあって最近思う。」

「今はバイトだから比較的時間もたくさんあるしね。こうやって吉田ちゃんとファミレスでゆっくり話す時間もあるし。」

狭山さんはそう冗談めかして言うとき軽く笑った。

それにつられるようにして僕も少し笑った。そしてそれから、「東京では何の仕事してたの?」

と、気になったので尋ねてみた。すると、狭山さんは、

「服飾関係の仕事。」

と、答えた。

「わたし、服のバイヤーの仕事がしたかったの。海外とかに行って売れそうな服を見つけてくるとかそういうの。」

「そっか。ずこいね。」

と、僕は感心して狭山さんの顔を見つめた。

すると、狭山さんは苦笑して首を振った。

「べつに全然すくなんてないよ。」

と、狭山さんは笑って言った。

「そういうバイヤーになるためには最低でも二、三年は売り場に立って経験を積まないと駄目なの。でも、わたしの場合はすぐに会社辞めちゃったから、全然バイヤーとかの仕事はやれなかったの。」

「・・・でも、お姉ちゃんの病気が治ったら、これからまたいちからはじめてもいいんじゃない？」

と、僕は少し考えてから言った。

「そうだね。」

と、狭山さんは僕の科白に少し寂しそうに微笑んで頷いた。

「吉田くんは頑張って有名な小説家になってね。」

と、狭山さんは冗談めかして言った。

僕は曖昧に微笑して頷いた。

大きな雲が太陽を遮って、店のなかが暗く翳った。そして少し経ってからそれはまたもとに戻った。ふと窓の外空に視線を向けてみると、ずっと遠くの空の高い場所に飛行機雲が細くたなびいているのが見えた。

妹の話

狭山さんと別れて家に帰ったのはもう夕方近くだった。

家に帰ると、妹が子供部屋でテレビを見ていた。

僕の実家には個人の子供部屋というものがない。あるのは十五畳くらいの大きな部屋がひとつあるだけで、それを共同で使っている。

妹とは五つ齢が離れている。現在妹は二十歳でアメリカの大学に留学している。でも、今向こうの大学は長期の休みに入っているらしく、その間特にすることもないので、妹は地元の宮崎に帰ってくることにしたようだった。

「どこにいつちよったて？」

と、妹はテレビ画面に視線を向けたまま宮崎弁で僕に話しかけてきた。

「ちよつとファミレスに。」

と、僕は言った。

「昨日日本屋さんで高校のときの同級生にばったり会って、それで久しぶりだし、ご飯でも食べようっていう話になったんだよ。」

「じゃあて。」

と、妹は僕の返事にどうでも良さそうに頷いた。

「裕子はいつ帰ってきたの？」

と、僕は尋ねてみた。今朝僕が起きたときには妹はどこかに出かけていて家にいなかったのだ。

妹は部屋の壁にかかっている時計に目を向けると、

「一時間くらい前やね。」
と、答えた。

僕は妹が座っている近くのフロリングの床の上に腰を下ろした。
それから、

「どこにいったの？」

と、特にどうしても知りたいというわけでもなかったのだけれど
尋ねてみた。

部屋のなかは冷房がよく効いていて涼しかった。窓から差し込んでくる日の光は微かに夕暮れの色素を帯び始めていた。もうすぐ夜になるんだな、と、僕はなんとなく思った。

妹はテレビ画面に視線を向けたまま、

「友達のお墓参り。」

と、短く答えた。

「お墓参り？」

僕ちよつと奇異に思っただけで妹が口にした科白を繰り返した。

すると、妹は僕の方を振りむいて、

「あれ、兄ちゃんに前に話さんかったけ？」

と、怪訝そうな声を出した。

「ほら、わたしの同級生が死んだ話前したがね。」

と、妹は非難するように言った。

「ああ。」

と、僕は曖昧に頷いた。

あれは確かに二年くらい前に僕が実家に帰省したときのことだ。

そのとき妹は自分の同級生が自殺してしまったことを僕に話した。

僕は妹から話を聞いたただけなので詳しい事情まではわからないのだけれど、妹の話によると、その妹の同級生は自分の進路のことや、家族についての問題で悩んでいたという話だった。僕はそのとき妹が浮かべていた一つにない思いつめた表情と、僕がそのとき感じたことを思い出した。

僕はそのとき、妹の話を聞いて、その同級生は何も死ななくても良かったんじゃないか、と、思ったものだった。でも、今ならその自殺してしまった同級生の気持ちも少しは理解できるような気がした。ひとは極端に気持ちが沈んでしまうと、何かを冷静に考えたり、受け止めたりすることができなくなってしまうものなのだ。全てが嫌になってそこから逃げ出したいような弱い気持ちになってしまう。

僕もその妹の同級生ではないけれど、意味もなく気持ちが沈んでしまつて、何もかもがどうでもいいような気持ちになつてしまうことが、そんなにもいつもというわけじゃないけれど、あった。

「今年がその自殺した子の三回忌やつたっちゃわ。だから、みんなでお墓参りにいつてきたとよ。」

と、僕が頭のなかで考えごとをしていると妹は続けて言った。

妹の話 2

「その子のお墓は海に見える、見晴らしのいいところであってかいよ。」

と、妹は続けた。

「ちよつとした山の上にあっちゃわ。だから遠くに海が見えてかいよ、今日は天気が良かったらきれいに海が見えちよつて、静かな風が吹いちよつてかい、なんかそういう場所にいるせいか、妙に寂しいような気持ちになつたね。」

「そつか。」

と、僕は妹の科白に頷いた。どう感想を述べたらいいのかわからなかった。

「・・・わたしよ。」

と、少し間を置いてから妹は言った。

「その友達に聞いてみてえことがあっちゃわ。」

僕は振り向いて妹の横顔を見つめた。俯き加減に眼差しを落としたり妹の顔は、何かに対して腹を立てているようにも見えし、何かを考へ込んでいるようにも見えた。

「あんたは自殺したことで幸せになれたてって訊きてえねえ。」

と、妹は言った。

「だって自殺したって何の解決にもならんわ。・・・ただ残されたひとたちが哀しいだけでかいよ。」

「・・・そうだね。」

と、僕は同意した。でも一方で、そうとわかっていても、どうしようもないときもあるのだとも思った。でも、口に出しては何も言

わなかった。

妹はしばらくの間黙ってテレビ画面を眺めていた。でも、それはただテレビ画面に視線を向けているだけという感じだった。妹の視線はそこにある映像を通り越して何か全然べつの風景を見ているようにも思えた。

「わたしよ。」

と、しばらくしてから妹はまた静かな口調で話はじめた。

「その子が自殺する一週間くらい前に朝学校で少し話したことがあるっちゃわ。わたし、そのとき宿題全然やってなくてかいよ、朝早く学校に来てやろうと思ったっちゃわ。したらその子がわたしよりも早く教室にきちよってかいよ、勉強しちよったっちゃわ。」

「うん。」

と、僕は相槌を打った。

「でも、その子は朝早く学校にきて勉強するような子じゃなかったっちゃわ。だかいよ、どうしたて。珍しいねってわたし声かけたっちゃわ。したらよ、その子、何て答えと思う？」

僕は妹の問いにわからないというように軽く首を振った。

「そしたらよ、その子、今度から俺心を入れ替えることにしたっちゃわって答えたっちゃわ。そう言ったときのその子の目がすごく澄んじよってかいよ・・・なんやろ、不自然なくらい静かで決意に満ちた目をしちよってかいよ・・・もしかしたら、そのときにはもう、自分は自殺するって決めちよったのかもしれないって今になってみると思っちゃうわ・・・だかい、そのときのことを思い出だすと、わたし、すごく哀しくなるね・・・哀しくなるっていうか、その子の気持ちに何も気がついてあげられなかった自分が嫌になるっていうか・・・

上手く言えんちゃけど・・・。」

「・・・そっか。」

と、僕は頷いた。僕のなかには今妹が口にした科白に対して答えられるような確かな言葉というものが、何もなかった。

しばらくの沈黙があつた。僕も妹も黙っていた。

沈黙のなかにつけっ放しになっているテレビの音と、クーラーの風の音が遠くに聞こえた。家の近所で犬がほえる声も聞こえた。部屋の中に差し込む日の光は次第に紅の色素が濃くなってきていた。

「今日のお墓参りにはその子が付き合つちよつた彼女も一緒に来ちよつたつちゃけどよ。」

と、いくらか長い沈黙のあとで妹は口を開くと言った。

「うん。」

と、僕はまた相槌を打った。

「その彼女は、わたしたちと話しちよつときは全然明るくて普通やつたちゃけど、いざお墓の前でみんなで手を合わせたときは、やっぱりちよつと泣いちよつたね。」

妹は軽く目を細めて言った。いま目の前にその友達の泣いている姿が浮かんでいるといったふうだった。

「好きなひとを失ってしまったっていう喪失感は、簡単に乗り越えられるものじゃないんだろうね。」

と、僕は言った。そしてそう答えながら、僕は海の見える高台にある、ひっそりとした墓地を想像した。そこには夏の濃い緑の木々が生えていて、それらの木々は海から吹き上げてくる静かな風に揺られて優しい音を紡いでいる。

「・・・わたしよ、その泣いている友達を見ちよってかいよ、可愛そうになって、何とか慰めてあげたいなって思ったちゃわ。」

と、妹は言った。

「でもよ、なんて声をかけたらいいのかわからなかったね。」

と、妹は言った。

「・・・わたしたちつてよ、結局無力やがね。」

と、妹は五秒間ほど黙ってしてから呟くような声で言った。そう言った彼女の声はひどく頼りなく響いた。

「すぐ近くで泣いているひとがいてもわたしたちは何もしてあげることができんわ。ただ見ていることしかできなくてかいよ・・・でも考えてみるとよ、世の中の大半のことがそうやなって思うちゃっわ。そのわたしの友達のことにしてもそうやけどよ・・・たとえば今世界のどこかでは戦争が起こちよってかい、苦しんでいるひとたちがいるわけやわ、でも、そのひとたちのためにわたしができることって何があるっちゃろうかと思ってもよ、ほとんど何も無いわけやわ。・・・わたしが現地にいつてそのひとたちのために何かするっていてもよ、たかがしれてるやろうしよ・・・。」

「・・・そうだね。」

と、僕は妹の言葉に同意した。

確かに僕たちにできることなんてほとんど何もないのかもしれないいな、と、思った。というか、日ごろの自分はもう自分のことだけで精一杯で、他人のことまで思いやる余裕がなかったりする。いや、余裕がないわけではなくて、僕は基本的に自分の興味のあることとか、どうやったら自分がもっと幸せになれるかといったことしか考えていないような気がした。

そう考えると、自分がすごく意地汚い人間のように思えて、嫌になった。そしてそのことに気がついた今この瞬間においても、そういった自分を積極的に変えていこうという意志を、僕は持てないでいた。要するに、僕は自分のことしか考えていない、最低の人間なのかもしれない。

そういう自分に比べると、妹はきちんと色んなことを考えているんだな、と、僕は感心して妹の横顔を見つめた。困っているひとたちや悲しんでいるひとの姿を見て、結果的にそのひとたちを救うことはできなかったとしても、そのひとたちのために何かをしようと、救いの手を差し伸べようと思うことができる人間なんだな、と僕は妹に対して尊敬の念さえ抱いた。

たとえ何もできなかったとしても、そんなふうに他人のために心を痛めたりすることができるということは、大切なことだし、尊いことだと思った。そしてそういう気持ちを持つことこそが、いつか何かの形で他の誰かを救うこともできるんじゃないかとも思った。

僕がそうやって思ったことを口にする、

「そうやといっちゃけどね。」

と、妹は頷いた。でも、妹は僕の言葉にあまり納得したようには見えなかった。難しい表情を浮かべて何か考え込んでいる様子だった。

どうやら彼女の心に広がった、暗く重い、湿度を持った感情は、僕の安っぽい理屈くらいではどうすることもできないようだった。だけど、それもそうだろうと、僕は思った。僕だつてもし、誰か大切な友達を、自殺という形で失ってしまったとしたら、きっといつまでもいつまでもその死んでしまった友達のことを考え続けることになっただろうと思った。

生きるこの意味や、死ぬこの意味について。そしてそれらのことに対する答えというものは、そう簡単には見つからないだろうとも思った。もしかすると一生かかっても永久に答えなんて見つからないのかもしれない。そして、ときどき思い出したように友人の死が、あるいは死そのものよりも重く、激しく、自分の心にのしかかってくることになるんじゃないかと僕は想像した。

時と伴に夕暮れの光は濃度を増していき、やがてそれは手に触れることができるくらいに密度を持った。そんな深い夕暮れの光に包まれていると、ふと今自分がどこにいるのかさえもわからなくなってしまうそうだった。

尽きせぬの望み 1

次の日はお昼近くに起きて、遅い目の朝食なのか、早い目の昼食なのかわからない食事を済ませた。食べたのは、母の作ってくれたご飯と味噌汁と鰯の開きだった。一人暮らしをしていると、なかなかこういったものを食べる機会はないので、少し大袈裟かもしれないけれど、久しぶりに人間らしい食生活を送ったような気持ちになった。

妹はまだぐっすりと眠り込んでいた。妹の睡眠欲にはちよつと尋常じゃないものがあつて、下手をすると夕方近くまで眠っていることがある。起こしてもどうせ無駄だろうと思つたのでそのままにしておいた。

食事を済ませると、子供部屋に戻つて、特にすることもないので本を読んで時間を過ごすことにした。手に取つたのは、大川裕二というひとが自費出版した小説だった。宮崎に帰つてきたときに、本屋さんの郷土本のコーナーでたまたま見つけて面白そうだったので買つてみることにしたのだけれど、読みはじめた小説は、好みにもよるだろうけれど、なかなか興味深く読むことができた。

物語は、若い男女の夫婦が、生まれたばかりの子供を病気で失つてしまふところからはじまっていた。

子供には生まれつき心臓に欠陥があつた。手術したものの、欠陥に気がつくのが遅かつたため、結局子供の命は助からなかった。

夫婦は子供の遺骨を抱えて実家に戻る。故郷の墓に子供の遺骨を埋葬するためだ。

その夫婦の実家は、海辺の小さな町にある。

ふたりは子供の遺骨を丁寧に埋葬したあと、その足で、子供の頃よく遊びにいった海辺を訪ねる。ふたりは小学校の頃からの幼馴染だ。

そこでふたりは死んでしまった子供のことについて話す。もし子供が成長して大きくなっていたらとか、あのときもつと早く子供の病気に気がついてあげることができていたらといった、どこにもたどり着けず、むしろ話すことで返って哀しみを深めてしまうような会話がしばらくのあいだ淡々と続けられる。

やがてふたりの間には沈黙が訪れる。それはまるでふたりが失ってしまったもののそのような重さと密度持った沈黙だ。

そんな深い沈黙のなかにいくつもの波の音が吸い込まれていく。

ふたりは黙ってそれぞれの思考のなかに沈み込んでいる。

いつもはきれいな青色をしているはずの海は、今日は曇っているせいで、暗く沈んだ色合いをしている。

と、一瞬雲に切れ間が出来て、そこから一筋の光が差し込む。その光に照らされて、一部分だけ明るく輝いた海面は、何か神秘的な存在がそこに舞い降りてきたかのようにも見える。

その光景を目にした妻は、それまで座っていた浜辺から立ち上がると、ふらふらとその光に誘われるようにして波打ち際まで歩いていく。

その妻の行動を目にした夫は、ふと不安にかられて妻のあとを追いかけていく。そして、

「どうしたんだ。」と、声をかける。

すると、妻は夫の方を振り返って、

「今、誰かの声が聞こえたような気がしたの。」と、答える。

「小さな子供のような声だった。」と、妻は続けて言った。

もしかしたらわたしたちの子供が何か伝えとしているんじゃないか、と。

夫はそんなことがあるはずがないと内心思うのだけれど、妻のことを気遣って、そうかもしれないね、と、優しく答えて特に否定しない。というか、彼自身も思う。もしかしたら、ほんとうに自分たちの子供が何か伝えようとしていたのかもしれない、と。

というのは、夫は、妻が波打ち際に向かって歩き出したとき、妻の言うとおり、誰かの声を聞いたような気がしたのだ。でも、それはただの錯覚に違いないと反射的に否定した。だけど、もし、その声が、ほんとうに子供の声だったとしたら、と、彼は考える。子供は自分たちに一体何を伝えようとしていたのだろ、と。

耳を澄ましてみるが、無論、子供の声なんて聞こえてくるはずもない。

東の間海を照らしていたやわらかな日の光は、再び雲に遮られて失われてしまう。あとにはまた潮騒の響きと、耳元を吹きすぎている強い風の音だけが残る。

打ち寄せる波の音と、風の音を重ね合わせるようにして聞いていると、それは誰かの哀しい歌声を聞いているように夫には感じられ

た。そしてそれは同時にひどく懐かしもあつた。ふと足元に視線を落としてみると、そこにはひとつの貝殻があつた。きれいな白い貝殻だった。夫はしゃがみこんでその貝殻を拾うと、それをポケットにしまった。

やがてふたりはきたときに同じように車に乗ると帰っていく。

夫は海岸線の道を黙って車を走らせながら、ふとちらりと助手席に座った妻の方に視線を向けてみる。

妻は車の窓に頭をもたせかけるようにして、どこか疲れた表情を浮かべて暗く沈んだ海に視線を彷徨わせている。

彼は妻に何か声をかけようと思うのだけれど、でも、何もかけるべき言葉を思いつくことができない。頭のなかに浮かびかけたいくつかの想いは、しかし、明確な形を結ぶ前に砂のように脆く崩れ去ってしまう。

彼は諦めて車の運転に神経を集中させる。

やがて、海岸線の道は終わり告げ、彼らの目の前に見慣れた小さな町が見えてくる。

この小説を読み終わると、灰色の色素が微かに溶けた冷たい海の水に意識が包まれたような気持ちになった。この物語の曖昧で静かな感じが、心のなかを出口を求めていつもまでもぐるぐると彷徨い続けるような感覚があつた。たとえば海で泳いだあと、寝るときになっても波に揺られている感覚がずっと身体に残っているように。

最後の場面で、主人公が、妻に声をかけようとして、何もかける言葉を思いつくことができないところが、哀しいと感じた。

尽きせぬ望み 2

ふと部屋の時計に目をやってみると、時刻はまだ一時時半をちょっと回ったあたりだった。僕は喉の渴きを感じたので、麦茶でも飲もうと思った。

子供部屋を出て、キッチンに向かう。そして冷蔵庫から麦茶の入ったタッパを取り出すと、それをコップに注いで一息に飲んだ。麦茶はよく冷えていて美味しかった。

妹はまだ眠っているのだろうかと思って妹が眠っている畳の部屋を見てみると、案の定、妹はまだ眠っていた。僕は試しにもう一時半だよと妹に声をかけてみたのだけれど、妹は生返事をするだけで、一向に置きだす気配はなかった。

このまま家にも退屈なだけなので、どこかに出かけようと思った。でも、どこに出かけようと考えて、僕はさつき読んだ小説のせいか、急に海が見てみたいような衝動に駆られた。

僕は服を着替えて出かける準備をすませると、母にことわって母の車を借りた。そしてその母の車で僕は海に向かった。

僕の実家のある小さな町は、さつきの小説ではないけれど海がすぐ近くにあって、車で三十分程も行くと、比較的きれいな海水浴場まで行くことができる。

車を運転するのはずいぶんと久しぶりのことなので少し緊張もしたけれど、海岸線の道をひとりで運転するのは楽しかった。平日なので道も空いていて、自分の好きなペースで運転することができた。

車のカセットデッキには、僕がずっと昔に録音したテープがそのまま残っていて、そのずっと昔に録音したテープを聴きながら車を運転した。

テープに録音されていたのは二、三年前に、僕が大学生だったときによく聴いていた音楽だった。それらの音楽に耳を澄ませていると、懐かしい気持ちになった。僕は大学生だった頃のことを色々思い出した。

そして、ほんの少しだけ切ないような気持ちになった。知らないうちにずいぶん色んなことが過去の出来事になってしまったんだなと、僕は感じた。僕は漠然とした喪失感を感じた。いつの間にか、かつてそこにあったはずものがもう既に失われてしまっているというのは、寂しい感じのするものだった。まるで雨の日の、人気のない浜辺を見ているみたいに心がしんとなった。

やがて僕の運転する車は目的地の海水浴場にたどり着いた。僕は駐車場に車を止めると、車を降りて、海水浴場に向かって歩いていった。

訪れた海水浴場はもうお盆を過ぎてしまっているせいでほとんど人影がなかった。浜辺の隅の方でカップルが水遊びのようなことをしているだけだった。

お盆を過ぎてしまうと、クラゲがたくさんでて、泳ぐことができなくなってしまう。だから、お盆前まであれだけ盛況だった海水浴場も、まるで道端に投げ捨てられて形がいびつに変形してしまった空き缶みたいにほとんど誰からも顧みられなくなってしまふ。おまけに今日は曇っているせいで、よけいに人影が少なく、浜辺にはまるで世界中から忘れ去れてしまったかのような静けさがあつた。

僕は波打ち際まで歩いていくと、そこに立ち止まって、寄せては返す波をぼんやりと眺めた。空の灰色の雲の色素を映して暗く沈んだ色合いをした海面を見ていると、ふと物悲しい気持ちになった。

僕も先月の七月で二十六歳になった。二十六歳という年齢は、世間一般の常識から考えればまだ十分に若いといえるのだけれど、しかし、自分のなかではずいぶん歳を取ってしまったな、という感覚があった。もう、二十六歳なんだ、と思った。まだ十九とか二十歳の頃は自分の未来に、明るい可能性や希望をいくらでも見出すことができた。それこそ努力次第で何でもできるような気がしていた。

でも、二十六歳という年齢になってしまうと、自分の未来がすっかり色あせてしまっているのを、感じないわけにはいかなかった。かつて信じていた華やかな将来が、実は、自分の無邪気な妄想に過ぎなかったことに、嫌でも気付かされてしまう。

僕はこれから先どうすればいいんだろうと暗いに気持ちになった。二十六歳でフリーターをしているなんて、すごく情けないような気がした。この先ほんとうに小説で結果を出すことができるのだろうかとか考えると、自信が持てないのが正直なところだった。

それなら小説を書くことはきっぱり諦めて、就職すればいいのかもしれないけれど、でも、小説を書くことを諦めた人生に、一体どんな望みを持てばいいのだろうか、と、ついつい大袈裟に考えてしまう自分がいた。所詮人生なんてこんなものだと諦めて生きていくしかないのだろうか。

あるいは就職して働きながら書くという法もなくはないのだろうけれど、でも、僕はあまり器用な方ではないので、就職して、義

務や目標に追われながら小説を書いていけるとはどうしても思えなかった。

実際に就職して働いている友人の話を聞いていると、みんな一樣に終わりのないサービス残業やノルマ等に追われて、あまり自分の時間が持てないのが実情のようだった。そういう話を聞いていると、積極的に就職しようという気持ちにはなれなかった。じゃあ、このままでもいいのかと思って、無論そんなことがあるはずがなくて、僕の思考は堂々巡りを繰り返してしまう。

結局僕は甘えているだけなのだ。それはわかっていた。でも、自分のそんな甘えた弱い気持ちはどうすることもできなかった。

僕の思考は次第に先細りになって、出口を見出せずに、自分のなかで小さく弱くなっていって、最後は波の音に飲み込まれるようにして消えてしまった。あとには大袈裟な言い方をすれば絶望に似た暗い気持ちちが自分の感情のなかにぼんやりと残っているだけだった。

僕はその場にしゃがみこむと、手を差し出して、打ち寄せてきた海の水に触れてみた。手に触れた、白く砕けた海の水はひんやりとして冷たかった。その海水の冷たさは、優しいようでもあり、懐かしいようでもあった。

僕はずっと昔の子供の頃に家族でこの海水浴場に遊びにきたときのことを懐かしく思い出した。あのときは今と違って天気はよく晴れていて、目映い夏の太陽が気持ちよく世界を照らしていた。だけど、それはもうずっと過去の出来ことだった。

僕はしゃがみこんでいた状態から再び立ち上がると、歩いていて、近くにあった自動販売機でコカコーラを買った。そして適当に

浜辺に腰を下ろすと、目の前に広がる海をぼんやり見つめながらコ
カコーラを飲んだ。

強い風の音と、いつもの波の音が耳元を吹きすぎていった。

やがてコーラの入っていた缶が空になってしまうと、僕は砂浜か
ら立ち上がって、駐車場までゆっくりと歩いて戻った。

そして車に乗ると、またひとりで車を運転して町まで戻った。

友人との再会 1

その日の夜は久しぶりに地元の友達と会う約束があった。

その友達とは高校を卒業して以来すっかり連絡が途絶えてしまっていたのだけれど、つい最近になって再び彼と連絡を取り合うようになったのだ。ミクシーという、インターネットを利用としたコミュニティサイトを通じて、彼が僕にメールをくれたのが切っ掛けだった。

彼の名前は大久保彰典という。

彼は高校の頃、僕なんかよりもずっと勉強のできる優秀な人間だった。彼は高校を卒業すると、福岡にある、国立の、かなり難易度の高い大学に進学した。

だから、当然彼は今頃エリートになっているのだろうと僕は思い込んでいた。

ところが、彼とのメールのやりとりをしていくうちにわかったことは、彼が僕と同じでフリーターをしているということだった。彼がフリーターをしているということを知った僕はすごく意外に思っていて、そのことを尋ねてみたのだけれど、彼がメールで説明してくれたところによると、彼は大学の就職活動の時期に、いわゆるひきこもりのような状態になってしまったらしかった。

僕たちが就職活動をした時期は、まだまだ日本全体が不景気で、なかなか思うように就職先が決まらない時代だった。

当然彼もその厳しい時代の洗礼を受けることになった。三十社以上の会社の採用試験を受けて、ひとつも内定をもらうことができなかった。それまで勉強関係で苦勞らしい苦勞をしたことのなかった彼にとって、それはたぶんはかなり屈辱的なことだったんじゃないかと思う。

おまけに、彼には両親の期待もあった。彼のお兄さんは彼以上に勉強もスポーツもできるひとで、大阪に本社のある大手の企業でバリバリ働いていた。

だから、両親は当然のように、次男である彼にも、それと同等か、あるいはそれ以上の結果を彼に求めた。

でも、彼はなかなかその期待に応えることができなかった。

三十社以上の会社に落とされてからも彼は諦めずに就職活動を続けたけれど、なかなか事体は好転しなかった。

そのうちに彼はどんどん自分に自信がもてなくなっていた。自分という人間は社会から必要とされていないんじゃないかと思うようになっていった。

暗い心はさらに暗い思いを呼び込み、ついに五十社目の採用試験に落ちたところで、彼は何もかもが嫌になってしまった。就職活動することも止め、必要のない限り、彼はほとんど住んでいたアパートから外にでなくなった。

ときおり両親から就職活動の進捗に関して電話がかかってきたけれど、そんな電話がかかってくるたびに、彼は激しく両親のことをののしった。自分がこんなふうになってしまったのはお前たちのせ

いだ、と、彼は罵倒した。そんな言葉を口にしたのは彼としても初めてのことだった。

父親も母親も自分のことなんて愛していないのだという深い猜疑心が、そのときの彼の心のなかには広がっていた。

必要な試験だけは受けてどうにか大学だけは卒業したけれど、彼は大学を卒業してからの日々をずっとアパートに引きこもって過ごした。

誰とも会わなかったし、誰とも話さなかった。両親が電話をかけてきても、全部無視した。両親が生活費を振り込んでくれていたのに、飢え死する心配はなかった。

そのようにして半年あまりの歳月が流れた。

やがて心配になった両親が彼を宮崎まで連れ戻しにきた。彼は抵抗したけれど、父親に半ば強引に説得され、宮崎の実家に帰った。実家に帰ってからしばらくの間、彼の引きこもりの生活は続いた。

でも、長い時間を両親と過ごすことで、次第に硬直していた彼の心もゆつくりとともに戻っていった。まず、両親が彼に謝罪の言葉を述べたことが大きかった。

自分たちはこれまでお前に過度な期待を持ちすぎた、これからはお前の好きなように生きればいいと父親はいった。生活のことは面倒をみてやるし、無理に就職しなくてもいいとまで父親は言ってくれた。

その言葉のおかげで、彼はだいぶ気持ち became 楽になった。もちろん、

完全に回復したというわけではなかったけれど、それでも以前よりはだいぶマシになったのは確かだった。かつてのように思いつめて死にたい等とは思わなくなった。

中学時代や、高校時代の友達と再び連絡を取り合うようになり、遊びにいたりするようになったのも、彼の心を早く回復させるのに手伝った。

そのようにして、彼はまた次第に少しずつ外の世界にでていけるようになった。半年程前からは家の近くのコンビニでアルバイトもはじめ、そのアルバイトをする傍ら、税理士になるための勉強もはじめていると彼はメールのなかで語っていた。

僕は彼とメールのやりとりをしていくなかで、僕の知らないところで、彼がそんなにも暗く、辛い時期を過ごしていたことに、まず驚ろかされた。彼は高校の頃どちらかというと明るくて、冗談なんかもたくさん言ったりする方だったからだ。

その頃彼を思うと、彼がひきこりなってしまうとはとても思えなかった。そしてそんな明るかった彼が、ひきこりになってしまふより他なかった程の厳しい現実を、僕は考えた。生きるということは、僕が考えているよりもずっと難しく、ときに試練に満ちているようだった。

友人との再会 2

近くのコンビニまで大久保が車で向かえにきてくれるということだったので、僕は待ち合わせ場所のコンビニに予定の時間よりも少し早く行った。そして、そこで雑誌を立ち読みして時間を潰した。すると、しばらくして僕は背後から背中を軽く叩かれた。

すっかり雑誌に夢中になってしまっていたので、ちょっと驚いて後ろを振り向くと、そこには背の高い大久保が笑顔で立っていた。たぶん百八十センチくらいはあるんじゃないかと思う。僕は身長は百七十センチしかないのに、どうしても彼を見上げる格好になる。

久しぶり見た大久保は、僕が想像していたよりもずっと明るい表情をしていた。ひきこもりなっていたと大久保はメールのなかで語っていたので、僕はつきり彼はもっと思いつめた表情をしているのかと思っているのだ。

「久しぶり。」

と、僕は微笑して言った。大久保に最後に会ってからあまりにも歳月が流れてしまっているのに、まるで初対面のひとに会ったときのような気恥ずかしさがあった。

大久保にしてもそれは同じことのように、彼はちょっと照れ臭そうに笑うと、

「元氣しちよったて。」

と、宮崎弁で訊いてきた。

「うん。元氣やよ。」

と、僕も宮崎弁で笑って答えた。

僕たちはひとまずコンビニから外で出ると、大久保の運転してき

た軽自動車に乗り込んだ。それから、お腹も空いたし、とりあえず夕食でも食べようという話になった。

久しぶりに友達と再会したのだから、こういう場合、飲みに行くのが普通なのだろうけれど、僕の場合、お酒が全く飲めないので、車でちよつと行ったところにある、上手いカツ丼を食べさせる店に行くことにした。

僕としてはべつに大久保にあわせてどこか飲み屋に行っても良かったのだけれど、僕がそう言つと、彼は俺もべつに酒を飲むのはそんなに好きじゃないからと言って、普通ご飯を食べにいくことになった。

訪れたカツ丼屋はちょうど夕食時ということもあつてそれなりに混雑していたけれど、上手い具合に僕たちが店に入ると同時に席が空いて座ることができた。僕たちは奥のテーブル席に向かい合わせに腰を下ろした。

しばらくして注文を取りに来た店員に、僕も大久保もカツ丼を注文した。

注文した料理が運ばれてくるまでの間、僕たちは最近町に新しくできた、ユニクロや、マクドナルドといった、チェーン展開している店のことについて話をした。

僕の実家のある町はかなり田舎なので、最近なつてやつとそれらの店ができたのだけれど、田舎育ちの僕たちにとって、自分の住んでいる町にユニクロやマクドナルドといった店があるというのは、決して大袈裟な言い方ではなく、かなり衝撃的なことだった。それはまるで東京タワーや六本木ヒルズといった建物がある日突然自

分の住んでいる町に出現したかのような驚きと興奮を僕たちにもた
らした。

そのうちに注文した料理が運ばれてきて、僕たちはほとんど無言
でカツ丼を食べた。食べたカツ丼はかなり美味しかった。これで値
段は八百九十円しかないのだから、すごく満足感がある。東京で
食べたら千五百円くらいは取られるんじゃないかという気がした。
田舎だと、手頃な値段で美味しいものが食べられるので、貧乏な僕に
とっては嬉しい限りだ。

料理を食べ終わると、僕たちはコーヒーを追加注文した。

注文したコーヒーはすぐに運ばれてきて、僕たちはその運ばれて
きたコーヒーをチビチビと飲みながら色んな話をした。何しろと彼
と話すのはほとんど七年ぶりのことなので話題が見つかることはなか
った。お互いの共通の友達が今どこで何をしているかといった話や、
お互いが覚えているようで覚えていないような思い出話を思いつく
ままに話した。

やがて、会話がひと段落したところで、彼がちょっとトイレに行
ってくると言って席を立った。彼が席を立ってしまうと、僕はちょ
っと手持ち無沙汰になって、なんとなく窓ガラスの外の景色に視線
を向けてみた。田舎なので窓の外の世界は、濃度の高い暗闇に塗り
つぶされてしまっている。僕は久しぶりにこんなに深い夜の闇を目
にしたような気がした。

そのうちに彼がトイレから戻ってきて、また僕の向かい側に腰を
下ろした。僕はテーブルの上のお冷を一口口に含むと、ちよつと躊
躇ってから彼に近況を訊ねてみた。もう以前のように激しく落ち込
んだり、精神的に不安定になっってしまうことはないのか、と。

僕の間に、彼はちよつときこちなく口元で微笑してから、もう今はだいたい大丈夫だ、と、答えた。もちろん今でもたまに気持ちがふさぎこんでしまうことはあるけど、でも以前に比べれば全然大したことはないし、税理士になるための勉強も順調に進んでいる、と、彼は笑顔で答えた。実は今度税理士になるための試験を受けようと思っているのだ、と、彼は明るい表情で僕に語った。

「そっか。結構順調みたいで良かったね。」

と、僕は安心して言った。

「うん。まあね。」

と、彼はちよつと照れ臭そうに口元で微笑むと、

「吉田はどうなの？」

と、尋ねてきた。

「小説は書けちよつて？」

メールのやりとりをしていくなかで、僕が小説家になりたいと思っていることはもう既に彼には伝えてあった。

「どうだろうね。」

僕は彼の視線を避けて軽く眼差しを伏せなければならなかった。

「書いてることは書いてるけど……でも、最近はずっと自信が持てなくなることがあるかな。」

と、僕は口元で曖昧に笑って誤魔化すように答えた。それから、僕は少し迷ってから、僕が昼間海辺で考えたことを彼に話して聞かせた。

二十六歳という年齢は結構いい歳だと思うこと。このさき小説を書き続けて結果を出せるのか、いまひとつ自信が持てないでいること。かといって、諦めるだけの覚悟もできずにいること。そんな僕

のいくぶん感傷的で惨めな話に、彼は決して茶化したりせずに真剣に耳を傾けてくれた。

「・・・まあ、なかなか難しい問題やね。」

と、大久保は僕の話聞き終わると、ちよつと考え込むような顔つきをして言った。それから、彼はふと思い出したようにテーブルの上に手を伸ばすと、そこにあるお冷を口元に運んで一口啜った。そしてまたもとのテーブルの上に戻した。

店員がやってきて、僕と彼とのグラスに新しくお冷を注ぎ足してくれた。僕たちは軽く頭を下げて店員に謝意を伝えた。

「俺も先のことを考えると結構不安になったりすつかいね。」

と、彼はそう言つと、少しの間何かに思いを巡らせるように黙っていた。

「前、メールでも話したけどよ。」

と、しばらくしてから彼はゆっくりとした口調で話はじめた。

「俺、大学のときに一回ひきこもりなつてしまつてかいよ・・・それ以来、ちよつとしたことですぐに落ち込んでしまつたよになつたちやつたわ。すぐに何をやってだめなような気がしてしまつてかいよ。・・・だかい、吉田の気持ちはわかる気がすんね。」

と、彼は静かな口調で言つた。

それから彼はまたお冷を手にとって口元に運んだ。僕も彼にっられようにしてお冷を少し飲んだ。

僕たちの座っている席から少し離れた場所に男女の入り混じつた学生風の集団がいて、彼らが楽しそうに喋つたり、笑つたりする声が聞こえた。

「・・・でもよ。」

と、彼は短い沈黙のあとで再び口を開くと言った。

「最近ひとつわかったことがあるっちゃわ。」

と、彼は言った。

「うん。」

と、僕は頷いて彼の顔を見つめた。

「そんなふうによ、物事を深刻に考えても何もならんって。案外、なんとかなるさって気軽に考えちよったほうだよ、結構物事って上手いくもんやなって。少なくとも精神的にはそれでだいぶ楽になるし、そうやって心にゆとりがあるとよ、結構前向きな気持ちになれるもんやっちゃなって。」

と、彼はそう言って軽く微笑すると、

「だかい、吉田もよ、そんなふうに来るのことを思いつめて考えたりせんでよ、もっと気軽に考えればいいっちゃわ。確かに世の中にはこんなふうにいるべきだみたいなモデルがあるけどよ、でも、ひとはそれぞれのペースがあるしよ、生き方があるっちゃかいよ、無理にそれに合わせんでかいよ、自分の思うように生きればいいと俺は思うちゃうわ。吉田が小説書きたいと思うちゃったら書けばいいっちゃねえと。また就職したくなったらそのときに考えればいいと俺は思うけんね。結構なんかなるもんやって。」

彼は優しい口調でそう言った。その言葉には、長く苦しい時期を乗り越えてきたひとだからこそ発せられる、温かみと力強さがあった。

僕はちよつとの間彼の言葉が自分の身体の中に染み渡っていくのを待つように黙っていてから、

「ありがとう。」

と、言った。

「なんか大久保のおかげでちょっと気持ちが悪くなった気がする。」

と、僕は照れ臭いのを誤魔化すために軽く微笑して言った。

「相談料をもらわんといかんね。」

と、僕の科白に、彼はそう冗談めかして言うと、少し笑った。

僕もそれにつられるようにして少し笑った。

友人との再会 3

店を出ると、彼がちょっと夜景でも見に行かないとか言い出して行くことになった。

男二人で夜景を見に行くのも妙なものだとは思ってたけれど、僕は自分の地元の町にそんな夜景を見ることができる場所があるなんて知らなかったので興味をひかれた。

彼の言う、その夜景の見える場所というのは、車で三十分程狭い山道を登ったところにあるらしかった。もともとその山道は神社に行くためのものらしいのだけれど、その道の途中に少し開けた場所があつて、そこから夜景を見ることができるといふ話だった。

僕たちはこんな狭い山道でもし対向車が来たらどうしようかとひやひやしながらクネクネと蛇行する山道を苦勞して登っていった。そしてようやくのことで目的の場所にたどり着くと、道端の隅に車を駐車して、夜景の見える場所まで歩いていった。

山の上にいるせいか、夏だというのに、半袖ではかなり肌寒く感じられた。空気にはもう微かに秋の匂いが混ざっていた。その匂いを嗅いでいると、いよいよ夏ももう終わりがけているのだと感じて、なんとも言えず物悲しさを感じた。まるで一瞬心のなかに、秋の日の、透明な日の光がすうと差し込んできたかのように心がしんとなった。

ちょっとした展望台のようなところがあつて、そこから夜景を臨むことができた。小さな町なので、スケールが小さくて全然大したことはないのだけれど、それでもきれいなことはきれいだった。ど

ちらかという物静かな光の粒が重なり合ってささやかではあるけれど美しい輝きを放っていた。

「ほら、あそこに道路があっがね。」

と、僕が目の中の夜景に見とれていると、横から大久保が話しかけてきた。振り向いて彼の顔を見てみると、彼は目の前に広がる夜景を指差していた。それで僕が彼の指さしている方向に視線を戻すと、

「あそこに、道路と道路が交差するところがあがつね。」
と、彼は説明して言った。

「うん。」

と、僕は彼の科白にただ頷いた。

「あそこを中心にして町の光を見るとよ、ちよつとハートの形に見えるちやが。」

と、彼はそう特意そうに言と、自分の言葉を冗談に紛らわせるように軽く微笑した。

見てみると、確かに彼の言うとおり、道路を照らす街灯の光が、町をハートの形に区切っているように見えなくもなかった。

「そんなの誰に教わつたの？」

と、僕が彼の方を振り向いて冷やかすように尋ねると、彼はちよつと照れ臭そうに笑つて、

「彼女やね。」

と、白状した。

「やっぱりか。」

と、僕は彼のちよつと照れたような表情が可笑しくて笑つた。

大久保の説明してくれたところによると、彼には現在付き合つて一年になる恋人がいるようだった。彼が現在付き合っているのは、高校時代の同級生で、彼女と付き合うようになったのは、大学の夏

休みのときにばったり彼女と再会したのが切っ掛けらしかった。

そのとき大久保は地元の自動車学校に通うために帰省していたのだけれど、その自動車学校に彼女も通っていて、お互いに顔見知りだということもあって、それから彼らは親しく話すようになったようだった。とはいっても、すぐに付き合うようになったわけではないうらしく（大久保は福岡の大学に通っていたけれど、彼女の方は宮崎の大学に通っていた。しかも、その当時の彼女にはもう既に決まった恋人がいた。大久保の方にしても、特に彼女を女性として意識していたわけではなかった）自動車学校を卒業してからの方たりの関係はただのメール友達としてのみ続いたみたいだった。

やがて、大久保が大学四年の半ば頃からアパートにひきこもるようになる、その関係すらも途絶えてしまったらしい。（ひきこもりの生活を送っていた大久保にとって、彼女とメールのやりとりを続けていくような気力は残されていなかった）しかし、そのあとで大久保が父親に半ば強引に説得されて宮崎に戻ると、次第に彼の心にもいくらか余裕が生まれるようになり、大久保はふとまた彼女のことが気になりだしたらしい。というのも、大久保は彼女とのメールのやりとりを一方的に終わらせてしまっていたので、そのことがずっと気がかりだったらしいのだ。それで、大久保がどうせ無駄だろうと思いつつも、音信不通にしていたことを謝罪するメールを久しぶりに彼女に送ってみると、意外にも彼女から返事が帰ってきた。

それから、大久保と彼女はメールのやりとりを再開させることになったようだった。

大久保はメールのやりとりをしていくなかで、まず自分が就職活動に挫折してひきこもりになってしまったことを正直に彼女に告げた。そのことを告げること、あるいはもしかすると彼女に嫌われ

てしまうんじゃないかと大久保は恐れていたのだけれど、でも、そんな彼の心配をよそに、彼女は親身になって大久保の話に耳を傾けてくれ、必要に応じてアドバイスもしてくれた。

そのうちにふたりはファミレスや喫茶店等で直接会って話すようになり、いつの間にか大久保は彼女のことを女性として意識するようになっていった。（その頃には既に彼女は以前付き合っていた恋人とは別れてしまっていた。社会人になってお互いにすれ違うことが多くなり、話し合いの末に、別れることになったのだ、と、のちに彼女は大久保に語った。）

そして大久保は悩んだ末に、思い切って自分の気持ちを彼女に告げた。実を言うと、自分は佐藤さん（彼の恋人の名前は佐藤香苗という）のことが好きなのだけれど、もし良かったら自分と付き合ってもらえないだろうか、と。彼は、ひきもりの、無職の男の愛の告白なんて到底受け入れてもらえないんじゃないかと思っていたのだけれど、でも、嬉しい誤算というか、予想外なことに、彼女は彼の愛の告白を受け入れてくれた。

そのようにして、去年の今ぐらいの時期からふたりは交際をスタートさせたらしかった。

「なんだかドラマチックだね。」

と、僕は久保の話の聞き終わると、微笑して感想を述べた。

「べつにドラマチックじゃないよ。」

と、彼は照れ臭いのか、僕の言葉を小さく笑って否定すると、それから、

「吉田は誰かおらんで？」

と、当然といえば当然だけれど、僕に恋人がいるかどうかを尋ねてきた。

「今のところいないかな。」

と、僕は曖昧に微笑して答えた。

「そっか。」

と、大久保は僕の返事を聞くと、どう言ったらいいのかわからない様子でただ頷いた。

「どこかにいいひとがいればいいんだけどね。」

と、僕は冗談めかして言いながら、何年か前に別れた恋人のことをふと少し、思い出した。もう彼女のことは忘れたつもりだったけれど、それとは違う感情が、まだ心のなかには残っていたみたいだった。

僕と大久保は少し間どちらも無言だった。沈黙のなかを夜の色素を含んだ冷たい風が流れ過ぎて行った。目の前に広がる町は淡く静かな光を淡々と放っていた。その静謐な光は網膜を通じて僕の心のなかに入り込むと、その箇所を微かに震わせていった。

「・・・そのひとさ。」

と、いくらか長い沈黙のあとで、僕は久保の方を見て言った。

大久保は振り向いて、いくらか怪訝そうに僕の顔を見た。

「佐藤さんだっけ？ 大久保はそのひとと結婚したいなと思うてるの？」

と、僕はふと思いついて尋ねてみた。僕たちくらいの年齢になると、知り合いや友人の間でもポツポツと結婚する人間が出てくる。

大久保ももしかしたら結婚とかを考えたりしているのかな、と、僕は気になったのだ。

僕の問に、大久保は、

「まあね。」

と、ちよつと照れ臭そうに微笑して頷いた。

それから彼はふいに真面目な表情を浮かべると、

「だから、そのためにももうちよつと頑張らんといかんって思う。」

と、大久保は自分自身に言い聞かせるように静かな口調で言った。
「とりあえず、税理士の資格を取って、就職して。」

彼はそこで言葉を区切ると、
「でも、・・・そうなるためにはまだまだ時間がかかりそうやけどね。」

と、彼は付け足して言つて、苦笑するように小さく笑った。

僕は彼のその苦笑に誘われるようにして口元を綻ばせると、
「お互い頑張らんといかんね。」

と、宮崎弁で言つた。

「そうやね。」

と、大久保は頷いた。

それからしばらくの間僕と大久保は黙つて目の前に広がる町の光を見ていた。その微かに青色の色素を含みながら白く輝く優しい光は、じつ見ていると、手を伸ばせばすぐ側に触れることができそうなくらい近くに存在するように思えた。

僕は試しに右手を前方の空間に向かってゆつくりと差し出してみただけでも、もちろん、手には何も触れなかった。手に触れることができたのは、夜の冷たい空気の流れだけだった。

光は、手の指先の、闇を超えていった、そのずっと遠くの向こう側にあった。

再び狭山さんと

それからの日々を、僕は家族で映画を見に行ったり、妹と川に泳ぎにいったり、あるいは一日中家に居て何もせずに過ごしたりした。

ほんとうを言えば、せつかく地元に戻ってきたのだから、久しぶりに誰か地元の友達に会いたかったのだけれど、もうお盆を過ぎてしまっているせいで（アルバイト先の関係で僕はどうしてもお盆の間は休みを取ることができなかった）その友人のほとんどが福岡や大阪といった仕事の先のある地方に戻ってしまっていて会うことができなかった。

そしてそんなふうになんとなく日々は流れて、僕が東京に戻るつもりでいる予定日も明日になった。また東京でアルバイト生活がはじまるんだと思うと少し憂鬱な気分になったけれど、かといって、このままずっと地元に残っていても仕方がなかった。

それから、僕がふと思い出したのは狭山さんのことだった。あれから狭山さんとは全く連絡を取っていなかった。僕がこのまま東京に戻ったところで狭山さんは特に何も思わないだろうとは思っただけれど、それでも一応挨拶くらいはしておいた方がいかなと思った。それで僕は狭山さんがアルバイトをしている本屋さんを訪ねてみることにした。

僕が狭山さんの働いている本屋さんを訪れると、彼女はレジで接客をやっていた。でも、平日なのでお客さんも少なく、彼女はわりと暇そうにしていた。彼女は僕が店に入っていくとすぐに気がついて笑顔を浮かべた。僕も軽く手をあげて挨拶をした。

僕は文庫本のコーナーを一通り見てまわってから面白そうな本を一冊見つけると、それを持って彼女のいるレジに向かった。

そして僕が文庫本を狭山さんに差し出すと、彼女はそれを受け取って、

「吉田くん、ひさしぶりだね。」

と、にこやかに微笑んで言った。

「そうだね。」

と、僕も微笑んで言った。

文庫本の値段は四百九十円だったので僕は財布から五百円玉を取り出して、それを彼女に渡した。彼女はありがとうございますと言って、僕におつりの十円玉を渡してくれた。彼女がレシートはいるかと訊いて、僕はいらないと答えた。

「明日、東京に戻るよ。」

と、僕は狭山さんが袋に入れてくれた本を受け取りながら言った。
「そっか。」

と、狭山さんは頷くと、軽く眼差しを伏せるようにして、

「寂しくなるね。」

と、言った。

「そうだね。」

と、僕は言った。

それから、彼女は僕の顔を見るとちよつと躊躇うように間をあけて、

「ねえ、吉田くんって今日ちよつと時間ある？」

と、唐突に訊いてきた。

「あるけど、どうして？」

と、僕が少し不思議に思っただけで尋ねると、

「実はわたし、吉田くんのお姉ちゃんに話しちゃったの。」

と、狭山さんはまるで悪戯がばれて、それを告白するときのよう
なはにかんだ微笑を口元にうかべながら話した。

「わたしの友達に小説書いてるひとがいるって。そしたらお姉ちゃん
が一度吉田くんに会ってみたいって言い出して。だから、もし今
日時間があったらお姉ちゃんに会ってくれない？わたしももう少し
でバイトあがりだし。」

僕は狭山さんの突然の申し出に上手く返事を打つことができなかった。
った。

すると、狭山さんは、

「もちろん、べつに吉田くんに何か予定があるんだったら無理には
いいんだけど。」

と、狭山さんは慌てて付け加えるように言った。

僕はそういう意味じゃないというように軽く首を振ると、

「いや、僕はどうせ今日一日暇だから狭山さんのお姉さんに会うの
は全然構わないんだけど、でも、大丈夫なのかなって思っで。」

と、弁解するように言った。

「小説書いてるっていつても、べつに何か面白い話ができるわけじ
ゃないし。」

「そんなに難しく考えてなくて大丈夫だよ。」

と、狭山さんは僕の科白に笑って答えた。

「ただ会ってくれるだけでいいから。お姉ちゃん、ずっと病院で退
屈しちゃって誰かと話してみたいだけなの。」

「そっか。」

と、僕は頷くと、僕で良かったらべつに全然構わないけどと微笑
んで答えた。

すると、狭山さんはじゃあ決まりねと笑顔で言って、一時間後に

店の前で待ち合わせをすることで話は纏まった。

約束通り僕が一時間後に狭山さんの働いている本屋さんに行くと、狭山は僕の姿にすぐに気がついた様子で、「吉田くん」と、笑顔で声をかけてくれた。

狭山さんは本屋さんの自動販売機が置いてある前付近に立っていた。それで僕が狭山さんの側まで歩いていくと、狭山さんは、

「なんか無理つき合わせちゃってごめんね。」

と、短く謝った。

僕は微笑してそんなことないよと答えた。

狭山さんが説明してくれたところによると、狭山さんのお姉さんが入院している病院はこれから車で一時間程いったところにある、隣の街にあるということだった。狭山さんはアルバイト先まで車できていて、僕たちはその狭山さん運転してきた車に乗って隣り街の総合病院まで向かうことになった。

行きの車のなかで僕が狭山さんのお姉さんの病状について恐る恐る尋ねてみると、狭山さんはちょっと考え込むような顔つきをして僕の質問に答えてくれた。

狭山さんの話では、今狭山さんのお姉さんは二回目の抗がん剤の治療が終わったところで、比較的に病状も安定しているということだった。抗がん剤の投与が終わったばかりの頃は薬の副作用による、吐き気や、痛みが酷かったらしく、側で見ていてちよつと痛々しいくらいだった、と、狭山さんは語った。

でも、そんなに辛い状況にあるにもかかわらず狭山さんのお姉さ

んは泣き言ひとついわないらしく、お姉ちゃんはほんとにすごいと思うと狭山さんは話した。でも、そう話した彼女の顔はどこなく哀しそうにも映った。

そのあと、車内にはどことなく深刻な雰囲気が漂って、僕も狭山さんもどちらかというと黙りがちだった。沈黙の間にぼつんぼつんと言葉を置いていく感じだった。

車は隣街へと続く海岸線の道を走っていて、窓の外には海が見えていた。でも、今日はどんよりと曇っていて、その窓の外に見える海は物憂げに翳って見えた。

そのうちに狭山さんの運転する車は隣街の総合病院にたどり着いた。

狭山さんのお姉さんの病室は十畳程の広さを持った四人部屋で、狭山さんのお姉さんのベッドはその病室の一番奥の窓際にあった。夏なので窓は締め切られていたけれど、その窓からはずっと遠くの向こうに海を見ることができた。

病院で

僕と狭山さんが病室に入っていたとき、狭山さんのお姉さんはベッドを起こして本を読んでいるところだった。狭山さんのお姉さんは僕たちが病室に入ってくると、すぐに気がついて本から顔をあげ、僕たちを歓迎するように笑顔を浮かべた。

狭山さんのお姉さんは思っていたよりも健康そうに見えたので安心した。多少頬のあたりがやつれたりはしていたけれど、髪の毛が抜け落ちていたり、極端にやせ細たりはしていなかった。

それから付け加えて言うと、狭山さんのお姉さんも、狭山さんと同じできれいなひとだった。モデルや芸能人になれそうなお嬢様立って美人というわけではないのだけれど、その意志の強そうな瞳や、何気ない仕草や、ふとしたとき浮かべる表情などから、内側から伝わってくる静かな美しさを感じた。

それはたとえば山奥を流れる澄んだ川の流れの、その水面に映りこんだ鮮やかな濃い緑の木々の葉を見ているときのような涼やかな美しさだった。

「お姉ちゃん、約束通り、吉田くんをつれてきてあげたよ。」

と、狭山さんはお姉さんの顔を見ると冗談めかして言った。

「ほんとにつれてきてくれるとは思わなかったけど。」

と、お姉さんは狭山さんの科白に軽く笑って答えると、改めて僕の顔に視線を向けて、

「はじめまして。狭山の姉です。・・・こんな寝巻き姿で初対面っていうのもあれだけど、いつも妹がお世話になってます。」

と、丁寧にあやめをして軽く頭を下げた。

僕はそんなふういきちんと挨拶をされるとは思っていなかったの
で変に緊張してしまつて、「どうも。吉田です。よろしく願ひし
ます。」

と、いくらかきこちなく挨拶を返した。

そんな僕の挨拶が奇妙に感じられたのか、お姉さんと狭山さんは
顔を見合わせると、噴出すようにして少し笑つた。僕もつられるよ
うにしてなんとなく小さく笑つた。

「今日はわざわざお見舞いにきてくれてありがとう。ゆかりが無理
やり連れてきたちゃつろ？ごめんね。」

と、狭山さんのお姉さんは僕の顔を見ると言つた。

「わたしが冗談で吉田くんに会つてみたいって言つたのを、ゆかり
は本気にしてみたいやつちやわ。」

僕は微笑してそんなことないですよと答えると、僕も一度狭山さ
んのお姉さんがどんなひとなのかと見てみたいと思つていたし、お
会いできて良かったですと僕は言つた。

狭山さんのお姉さんは僕の言葉にどこか安心したように微笑する
と、

「ゆかりから聞いたんだけど、ほんとに吉田くんって小説書いてる
の？」

と、ちよつと改まつた口調で尋ねてきた。

僕はお姉さんの間に、「はい。書いてますよ。」と簡単に答えた。
「そつか。すごいね。」

と、お姉さんは感激したように言つた。

僕はなんだかお姉さんに誤解を与えてしまつたように感じて、

「いや、全然すごくないですよ。」

と、苦笑して言った。

「小説書いてるって言ってもプロじゃないし・・・。」

「いや、すごいよ。」

と、お姉さんは僕の言葉を否定して言った。

「わたしも本やったら結構読む方やけど、自分で物語は書けんかいね。」

「いや、書こうと思えば意外と書けるかもしれないですよ。」

と、僕は言った。

すると、お姉さんはとんでもないというふう to 首を振って、

「わたしには絶対無理やわ。想像力とかゼロやかいね。」

と、お姉さんは自嘲気味に笑って言った。

「吉田くんってどんな小説書いてるの？」

と、横から狭山さんが尋ねてきた。

それで僕はお姉さんの顔に向けていた視線を狭山さんの方に向けた。

「うーん。どんなだろう。」

と、僕は狭山さんの問にちよつと眉根を寄せて答えた。

「一口で説明するのは難しいけど、どちらかといえば文学ぽい感じなのかな。」

と、僕は少し考えてから言った。

「文学っていつでも色々と思うけど、どんな感じ？」

と、狭山さんが続けて尋ねてきた。

僕は狭山さんのその問にまた更に頭を悩ませてから、基本的には自分の小説を読んだひとが何かについて考えさせられたり、啓発されたり、あるいはその小説を読むことでちよつとでも前向きになれる

るような物語が書きたいと思っていると僕は答えた。

でも、今のところそれが上手くいっているかどうかはわからないけどと僕は付け足して言った。

「今はどんな話を書いちゃった?」

と、お姉さんが興味を惹かれたように尋ねてきた。僕はお姉さんの顔に視線を戻すと、

「今は花の話を書いてます。」

と、簡単に説明した。

「僕の大学のときの友達がモデルなんですけど、その子が、色々苦労しながら冬の花を育ててるっていう話・・あんまりストーリーとよべるほどのものはないんですけどね・・でも、その主人公の女の子が色んなひとと出会って話して考えさせられたりしながら成長していくような物語にできたらいいなって考えてます。」

「へー。面白そうやね。」

と、狭山さんのお姉さんはその瞳のなかに明るい微笑を含ませて僕の顔を見つめた。僕はちょっと照れ臭くなって軽く眼差しを伏せた。

「もし、その小説が完成したら見せよ。」

と、お姉さんは微笑んで言った。

「郵便か何かで送ってくれてもいいし、今はインターネットもあるし、簡単に送れるちゃる?わたし、その吉田くんの書いた小説がすごく読んでみたくなってきた。」

「いや、でも、きつとがっかりすることになると思うから、読まない方がいいですよ。」

僕は苦笑いして言った。

「がっかりなんてせんが。絶対送ってよ。楽しみにしちよっかいね。」

と、お姉さんは微笑みながら念を押すように言った。

「わたしも吉田くんの書いた小説読んでみたいかも。」

と、狭山さんもお姉さんの言葉を後押しするように悪戯っぽい微笑を口元にたたえて言った。そうやってふたりに頼まれると、僕としても断り切れなくて、じゃあ、できたら送ります、と、曖昧に了解した。

その僕の返事を聞いて、「やったー。楽しみ。」と楽しそうに話している狭山さんとお姉さんを見てみると、果たして自分はふたりの期待に応えられるような小説を書くことができるだろうか。今からすごくプレッシャーを感じてきて僕は不安になった。

それから、僕がふと気になったのは、狭山さんのお姉さんの手元に置かれている一冊の本だった。ガバーはついていなかった。それが誰のどんな本なのかはわからなかったけれど、ページの色あせぐらいや、適度くたびれた感じから、その本がかなり読み読み込まれていて、なおかつ大切に扱われている本だということがわかった。

それで僕が何気なくその本はなんの本なんですかと尋ねてみると、狭山さんのお姉さんは僕の顔を見て、ちよつと寂しそうに微笑すると、

「ああ。これ？これは詩集やっちゃわ。夏の終わりの静かな風っていう題名の。」

と、教えてくれた。

お姉さんがそう僕に教えてくれたとき、狭山さんがお姉さんの顔をどこか気遣わしげな眼差しで見つめたのが、僕はちよつと気にな

った。

「マリー・クロードっていうフランスの詩人が書いた本やっちゃけどね、吉田くんは知ってる？」

僕はお姉さんの間に全然わからないというように首を振った。

「僕はほとんど詩は読まない人間だから。」

僕が苦笑して言うと、お姉さんも軽く口元を綻ばせて、

「わたしも全然詩なんて読まん人間やったちゃけど、前付き合っちょったひとがすごく詩とか読むのが好きなひとでかいね、そのひとにオススメされて読むうちに、わたしも好きになったとよね。」

と、お姉さんは言い訳するように続けて言った。

「どんな内容の詩なんですか？」

と、僕は興味を惹かれて尋ねてみた。

すると、お姉さんは僕の顔から本の上に眼差しを落とすと、少しの間どう説明したものか考えるように黙っていて、やがて顔を上げて僕の顔を見ると、

「ちよつと一口で説明するのは難しいちゃけど、なんていうか、ほんの少し哀しくて、でも、優しい詩やね。」

と、説明してくれた。

「この詩を書いたひとは女のひとで、その作者には敬愛にするお兄さんがひとりいたんだけど・・・」

と、お姉さんは言った。

「そのお兄さんは音楽がすごく好きなひとで、自分で作曲したり、歌を歌ったりしちゃって・・・そのお兄さんはプロのミュージシャンになることを目指しちよつたちゃけどね、でも、現実は厳しくて、なかなか音楽では芽がなくて・・・それで最後お兄さんは自分の才能のなさに絶望して自殺してしまうちゃけどね。」

「・・・何かちょっと哀しい話ですね。」

と、僕は言った。すると、お姉さんは僕の言葉に軽く頷いて、
「それで、この夏の終わりの静かな風っていう詩集は、その死んでしまったお兄さんのことを想って書いた詩集やちゃっわ。」

と、説明した。

「そっか。」

と、僕はお姉さんの説明に頷きながら、何日か前に妹と交わした会話をふと思い出した。

「でも、なんで夏の終わりの静かな風っていうタイトルなんですか？」

と、僕は気になって尋ねてみた。

すると、お姉さんは何かを確認するようにまた本の上に眼差しを落として、

「それは、この作者のお兄さんが死んでしまったのが夏の終わりやっただから。」

と、静かな声で答えた。その声には、どこか誰のことを偲ぶような寂しげな響きがあった。それから、お姉さんは本を開いてページを繰ると、とあるページで手を止めて、

「ここに書いてる詩がわたしが一番好きな詩やっちゃわ。そんなに長くない詩やかい、ちよつと読んでみてよ。」

と、お姉さんはそのページを広げたままの状態にして僕に本を手渡してくれた。

僕はわかりましたと答えて、そこに書かれている、それほど長くはない詩に目を通してみた。

今年もまた夏が過ぎ去ろうとしている

あなたの大好きだった夏がまた終わろうとしている
あなたはまるで夏が終わってしまうのを嫌がるみたいに
ひとり

わたしを残して遠くにいつてしまった

どうしてなの？

わたしはまたあなたのその優しい歌声が聞きたいのに
今年もまた夏が終わって寂しいねって話したいのに
もうどこにもあなたはいないのね

もうどこへ行ってもあなたの歌声を聞くことはできない
永遠に

ねえ わたしはこれから夏が失われてしまつて
永久にわたしの大嫌いな凍てつく冬で世界が満たされてしまった
としても

あなたに戻ってきてほしいの
あなたの歌声が聞きたいの
側にいて

昔みたいにわたしに色々な話を聞かせて欲しいの

いま、夏の終わりを告げる静かな風が
そつと耳元を吹きすぎていった
その風は穏やかな海原を渡り
鮮やかな緑の木々の葉をそつと揺らし
わたしの耳元をたどり着いて
何か美しいものが砕けてしまふときのように
そつと音を解き放つていく

そしてそれはほんの少し

あなたの歌声に似ている気がする

少しだけ哀しくて

だけどとても優しく感じられるその歌声に

わたしは夏が終わってしまふのが寂しい

だけど でも

こう思うことにしたの

わたしはわたしにできることをしようって

わたしには何ができるだろうって

あなたの代わりに

わたしにできることが何かあるかもしれないって

そこに書かれている詩を読み終わると、哀しいような優しいようなそんな不思議な気持ちになった。確かにそこに描かれている詩の内容はとても哀しいもののただけれど、でも、その詩の底流に流れている、兄を慕う優しい想いのせいなのか、まるで心が淡い水色の色素を持ったやわらかな水に包まれたように、ただ哀しいだけではなくて、同時にとても穏やかな気持ちになることもできた。

たとえばそれは突然降り始めた夏の雨が道端の草の花を濡らし、やがて雨が上がったあとに、草の花についた細かな水滴を目にしたときのような、心に涼しいような、甘いような感覚を、その詩は僕

にふと感じさせた。

「何か哀しい詩だけど、でも、不思議と優しい気持ちにもなれる詩ですね。」

と、僕は受け取った詩集を狭山さんのお姉さんに返ししながら感想を述べた。

「そうやる。」

と、お姉さんは僕の手から詩集を受け取りながら目元で微笑んで言った。

「狭山さんも、この詩集読んだことあるの？」

と、僕は狭山さんの顔に視線を向けてなんとなく訊ねてみた。すると、狭山さんは僕の顔を見ると、苦笑するように小さく口元を綻ばせて、

「わたしは詩なんて興味ないって言ったんだけど、お姉ちゃんがあるまりしつこくオススメするから」

と、答えた。

「でも、よかったやろ？」

と、お姉さんが狭山さんの顔を見て冗談めかして尋ねると、狭山さんは、

「まあね。」

と、小さく笑って認めた。

「吉田くんも気が向いたら読んでみてよ。」

と、お姉さんは僕の顔に視線を戻すと言った。

「わりと有名な詩集だし、大きな本屋さんに行けば大抵おいてあると思うかい。」

「そうですね。また今度探してみます。」

と、僕は微笑んで答えた。

病院で 2

それから、狭山さんのお姉さんが突然狭山さんにピアノを弾いてよと言い出して、この病院にある、レクレーション室のような場所にみんなで移動することになった。

狭山さんのお姉さんは、狭山さんがお見舞いに来てくれたときは毎回必ずといっていいほどこうやって狭山さんにピアノを弾いてもらっているようで、狭山さんが今日は吉田くんがいるから恥ずかしいと言っても、お姉さんはこの哀れな病人の唯一の楽しみを取り上げる気？と本気とも冗談ともつかないような口調で狭山さんを脅して半ば強引に狭山さんにピアノを弾くことを了解させた。

「ゆかりは小学校一年生のときから高校三年のときまでピアノを習ってたからすごくピアノが上手なのよ。」

と、お姉さんは狭山さんのことを見てからかうように言った。

「じゃあ、楽しみですね。」

と、僕が微笑んで言うと、

「すごく下手くそだからあんまり期待しないでね。」

と、狭山さんは小さく笑って否定した。

ピアノはまるで学校の教室のような、二十畳程はありそうなただ広い部屋の片隅にちょこんとあった。

その部屋はもととお見舞いについてきた子供たちが退屈したりしないようにするために設けられた部屋のように、積み木などの玩具や、やわかいゴム製のボールなどの様々な遊具が置かれてあった。そしてそのなかに混じって、どこか寂しそうに、黒のアップラ

耳にしたことがあるんじゃない？」

と、明るい声で言った。

それから、狭山さんは鍵盤の上に視線を戻すと、何か神経を集中させるように軽く瞳を閉じた。僅かな沈黙ができて、その沈黙なかには、窓の外の、ずっと遠くに見える海の潮騒の音が響いてきそうにも感じられた。

やがて、狭山さんは閉じていた瞳を開くと、ゆつくりとピアノを弾き始めた。

その狭山さんが弾き始めたピアノの曲は、確かに狭山さんが言ったとおり、僕もどこかで耳にしたことのある曲だった。たぶん小学校の授業や、何かのＣＭの挿入曲で。

その音楽に耳を傾けながら僕がふと思い出したのは、さっき狭山さんのお姉さんに見せてもらった詩集だった。その音楽の表面全体を包んでいるものは、悲しみや喪失感といった感情なのだけれど、でも、その音楽の芯の部分に、何かゆつくりと希望へと変わって行きつつあるものを、あるいは希望を模索して彷徨う意志のようなものを、僕は感じ取ることができるような気がした。

目を閉じて狭山さんの奏でる旋律に意識を集中させていると、まずイメージのなかに浮かんでくるのは白い、一輪の花だった。そしてその一輪の白い花は、深い湖の底で冷たい水に揺られながらそつと誰に知られることもなく咲いている。

深度の深いそこには普段あまり日の光が差し込まない。一日の大半の時間が微かに青色の色素を含んだような薄闇に満たされてしまっている。でも、一日のごくわずかな短い時間の間だけ、そんな深

い湖の底にも太陽の光が差し込むことがある。

やがて彼女にとっては永遠とも思える距離から、太陽の、その微かに金色の色素を帯びたやわらかな光が差し込み、彼女の身体を優しく包み込む。その澄んだ温かな光に包まれた彼女の身体は束の間、まるで彼女が光そのものになったかのように美しい輝きを放つ。

狭山さんの演奏に耳を傾けながら僕が思い浮かべたのはそんな光景だった。

「すごくきれいな曲だね。ちょっとだけ哀しい感じもするけど、でも、全体的に深い優しさに満たされているっていうか、上手く言えないけど。」

僕は狭山さんの演奏が終わるといくらか興奮して言った。

「ありがとう。」

と、狭山さんは僕のコメントにちょっと照れ臭そうに笑って答えると、

「だげと、わたしもこの曲好き。たぶん、わたしが知ってるピアノ曲のなかでは一番好きなんじゃないかな。」

と、狭山さんは楽しそうに微笑んで言った。それから、狭山さんはお姉さんの顔に視線を向けると、

「お姉ちゃん、今日のわたしの演奏はどうだった？」

と、冗談めかして尋ねた。

「少なくとも八十点はいつてると思うんだけど。」

その狭山さんの言葉に、お姉さんはわざとらしくしぶい表情を作ってみせると、

「全然。四十五点つてところやつちやない？」

と、首を左右に振りながら言った。

その点数を聞いて狭山さんがちよつと不服そうにえーと声を上げ

ると、お姉さんは可笑しそうに笑って、

「冗談やが。もちろん百点に決まっちゃがね。」

と、明るい口調で言った。それから、

「わたしのために素敵な演奏をありがとう。」

と、微笑んで改まった口調で言った。

「これで病気も早く良くなる気がする。」

「こんなわたしのヘタクソな演奏で姉ちゃんの病気が早く良くなるんだったら、わたし何万回でも弾いてあげるわよ。」

と、狭山さんはお姉さんの顔に視線を向けると、優しい笑みを口元に広げて言った。

「ありがとう。」

と、お姉さんは小さく笑って言うと、それから僕の顔に視線を向けて、

「さっきの曲は、たぶんゆかりはまだ小さかったら覚えてないと思うけど、わたしのお母さんが好きでよく弾いてた曲やっちゃわ。だから、あの曲を聞くとね、すごく気持ちが落ち着くとよね。わたし。」

と、お姉さんは口元に微笑を浮かべて言い訳するように言った。

「ねえ、見て。」

と、唐突に、狭山さんがお姉さん言葉を遮って言った。

それで僕が狭山さんの方に視線を戻してみると、狭山さんは窓の外に視線を向けていた。僕は狭山さんの視線の先を辿ってみた。するとそこには、灰色の厚い雲を切り裂いて太陽の光がいくつもの巨大な柱となって地上に降り注いでいる光景が見られた。

「すごくきれいじゃない？」

と、狭山さんは目の前に広がる光景に微かに目を細めて言った。

「そうだね。」

と、僕は相槌を打った。

巨大な光の束のうちのいくつかは遠くに見える海にもたどり着き、その暗い海面の一部分を黄金色の光に優しくきらめかせていた。

「明日は晴れね。」

と、お姉さんが決め付けるように言った。

海辺の花

狭山さんのお姉さんと別れて病院をあとにしたのはもう午後の五時過ぎだった。

帰りもやはり狭山さんが車を運転して帰っただけけど、その車を運転する狭山さんの表情は病院にいるときに見せていた明るい表情とは違って、どこか沈んで見えた。言葉数も少なく、僕が話しかけても、狭山さんは何か物思いに沈んでいる様子で、ひとつの質問が次の話題に繋がって会話が広がっていくというようなことがなかった。

車が再び海岸線の道に入ったあたりで、狭山さんが僕に音楽をかけてもいいかと訊いて、僕はもちろんどうぞ答えた。

狭山さんが車のカーステレオのボタンを押すと、車のスピーカーから流れはじめたのは、微かに水色の色素を帯びたような、静かで繊細な感じのする女の人の歌声だった。英語の歌だった。

「きれいな曲だね。誰が歌ってるの？」

と、僕は気になったので振り向いて狭山さんに尋ねてみた。すると、狭山さんは目の前に道に視線を向けたまま、

「エミリー・ローレンスっていうひとだったかな。」

と、ちよつと自信なさそうに答えた。

「エミリー・ローレンス？」

と、僕は彼女の言葉を反芻してから、

「結構有名なひと？」

と、続けて尋ねてみた。

すると、狭山さんは苦笑するように軽く口元を綻ばせて、
「実はわたしもあんまり詳しくないの。」
と、答えた。

「ラジオでたまたま流れてて、それでいい曲だなんて思ってたあとでCD屋さんで探して買ったんだけど・・・でも、そのときすぐくわがりづらい場所に一枚だけしか置いてなかったから、そんなに有名じゃないのかも。」

「そっか。」

と、僕は狭山さんの説明に頷くと、少し間をあけてから、
「でも、いい曲だね。僕もこういう感じの曲結構好きだな。」
と、微笑して言った。

「・・・目を閉じて聞いていると、雨の日の日曜日の朝って感じがしない?」

と、狭山さんちらりと僕の顔に視線を向けると言った。

「雨の日の日曜日で、家にいてなにもやることなく、それで窓の外に降る静かな雨を見てるって感じ。」

僕は試しに狭山さんがいま口にした情景を思い浮かべてみた。すると、さっき狭山が口にした通りのイメージが、今見えている視界のなかに重なるようにふうっと鮮やかに浮かびあがってきた。

「ああ。ほんとだね。確かにそんな感じがするかも。」

と、僕は微笑んで言った。

「でしょ?」

と、狭山さんは微笑んで言うと、

「確かそのダッシュボードのなかにCDのケースが入ってたと思うんだけど。」

と、思いついたように言った。

僕は狭山さんの方に視線を向けて、見てみていい？と尋ねた。狭山さんは微笑んでどうぞと答えた。

ダッシュボードを開くと、確かに狭山さんの言ったとおり、一枚のCDケースが入っていた。ジャケットにはあまり見たことのない鳥の絵が描かれてあった。

「その鳥、絶滅しちゃってもう世界にはいない鳥なの。」

と、狭山さんは僕が手にしているCDケースにちらりと視線を走らせて言った。へー。詳しいんだね。と僕が感心して言っていると、狭山さんは、

「ケースに入ってるライナーノーツにそう書いてあったんだけどね。」

と、小さく笑って言った。

「そっか。」

と、僕は狭山さんの科白に軽く笑って頷くと、CDケースのなかからライナーノーツを取り出して広げてみた。

「この曲、歌詞も結構いいの。」

と、狭山さんは微笑んで言った。

「だいぶ前に読んだから、詳しい内容は忘れちゃったんだけど、確か暗闇のなかで希望を見つけようとする、静かな感じの詩だったと思う。」

と、狭山さんは言った。

僕は日本語に訳された歌詞を辿ってみた。

夕暮れの光は次第に薄れていって

透き通った青い闇が静かに世界を覆いはじめる

もうすぐ夜になるんだなってわたしは思う

夜の訪れと共に気温は下がり

冷たい風がわたしの心から体温を奪っていく

わたしは夜が嫌い

だって嫌なことは大抵いつも夜に思いつくから

ねえ わたしはときどき不安になるの

このさきわたしはどこにも辿り着けないんじゃないかって

このさきどこまで歩いていっても

出口なんてどこにもなくて

ただ同じ場所をぐるぐると

永遠に歩き続けることになるんじゃないかって

きっと大丈夫だって

声に出して

自分に言い聞かせていないと心細くて

だけど 今はそんな自分の声さえ

訪れた新しい闇のなかに吸い込まれていってしまう

所詮こんなものだって

諦めるしかないのかな？

時間の経過と共に

どんどん夜の闇は深く濃くなっていく

でも

今日は月の明かりがとても明るいから
少しだけ

闇のなかでも平気でいられる気がする

月の光は友達の声みたいに明るくて
わたしの気持ちをそっと温めてくれる

そういえば今日、花の種を植えてみたの
きれいな花が咲くんだよって

友達がわたしにプレゼントしてくれたから

わたしは植物なんて育てることなんてないし

ちゃんと花を咲かせられるかどうか自信がないんだけど

でもね 頑張ってみようと思うの

だって どんな花が咲くのか楽しみだし

花が咲いたときのことを想像すると

心が希望を持ったみたいに弾むから

そしてもしも花を咲かせることができれば

一番最初に見せてあげたい

友達に

ありがとうって

想像の花が

わたしの心の周りを
そつと明るく輝かせてくれる

「何か静かな感じのする詩だね。」

と、僕は日本語に訳された詩を読み終わると、狭山さんの方を振り向いて言った。

「まだ希望は見つからなくて不安なんだけど、でも、そこには前向きな意志があつて・・なんか読み終わったあと、心がふわって軽くなるみたいな感じがする。」

「ね、いい詩でしょ？」

と、狭山さんは僕のリアクションに明るい微笑を目元に浮かべて言った。

「何か特別メッセージみたいなのは書かれてないんだけど、でも、作者の優しい想いというか、何かを信じようとする想いみたいなものが伝わってくるような気がする。」

「そうだね。」

と、僕は狭山さんのコメントに頷いた。

「でも、この詩に書かれている、嫌なことは大抵夜に思いつくっていうのはほんとうにそうだなって思う。」

と、僕は再び歌詞カードに目線を落としながら何気なく言った。

「僕も嫌なことは大抵いつも夜に思いつくから。」

「嫌なことって？」

と、狭山さんは目の前の道に視線を向けたまま興味を惹かれたように尋ねてきた。

僕は少し躊躇ってから、大久保にも話したことを、狭山さんにも

話して聞かせた。自分が書いている小説のことについて。それから、これから先の将来のことについて。

「・・・確かに将来のことを考えると色々考えちゃうよね。」

と、狭山さんは僕の話聞き終わると、少ししんみりとした口調で言った。それから狭山さんは何か考え事をするように難しい表情を浮かべて車の運転を続けていたけれど、やがて、

「わたしもね。」

と、口を開くとポツリと言った。

「わたしも将来のことを考えるとときどき不安になるかな。」

狭山さんは少し弱い声で言った。

僕は歌詞カードから目線をあげて狭山さんの横顔に視線を戻した。

「・・・不安になるっていうか、怖くなるの。・・・もしもこのまま上手くいかなかったらどうしようって。もし、お姉ちゃんの病気が治らなくて、それでお姉ちゃんが・・・。」

「大丈夫だよ。」

と、僕は狭山さんの言葉を遮るようにして言った。

海辺の花 2

「大丈夫だよ。」

と、僕は狭山さんの言葉を遮るようにして言った。

「今日、狭山さんのお姉さんにはじめてあつたけど、元気そうに見えたし・・・大丈夫だよ。治療だって順調に進んでるんでしょ？」

「・・・うん。そうなんだけどね・・・。」

と、狭山さんは僕の科白に考え込むようにして弱く頷くと、少し間をあけてから、

「今日、お姉ちゃんが吉田くんに見せた詩集あつたでしょ？」
と、唐突に言った。

「・・・あの詩集をお姉ちゃんにプレゼントしたひとと、ほんとうはお姉ちゃん、結婚するはずだったの。」

と、狭山さんはポツリと小さな声で言った。

僕は彼女が一体何の話をしようとしているのか不思議に思ったけれど、黙って彼女の言葉に耳を傾けていた。

「・・・でもね、そのお姉ちゃんの婚約者だったひと、死んじゃったの。」

と、狭山さん淡々とした口調で言った。

僕は狭山さんの口にした科白があまりにも唐突だったので、上手く相槌を打つことができなかった。僕は驚いて彼女の横顔をただじっと見つめた。

「・・・交通事故だったの。」

と、狭山さんは少し小さな声で続けて言った。

「車を運転してるときにカーブを曲がりきれてなくて・・・それで・・・」

「・・・そんなことがあったんだ。」

と、僕は少し間をあけてから曖昧に頷いた。どんなふうに感想を述べたらいいのか僕にはわからなかった。

「婚約者が交通事故で死んじゃうなんて嘘みたいでしょ？ドラマとか小説じゃないんだから。・・・でもね、ほんとに死んじゃったの。」

僕はどう答えるべきなのかわからなかったので黙っていた。

「わたしもそのひとに何度か会ったことあるんだけどね、お姉ちゃんその婚約者だったひとに。」

と、狭山さんはゆっくりとした口調で話し続けた。

「・・・すごく優しくそうなひとだった・・・予備校で英語の先生をしてるんだって話してたけど・・・」

狭山さんは、どこか遠くの、淡い色合いに霞んだ風景を見つめるようにときのように、微かに目を細めて言った。

「笑ったときの顔がね、すごく温かくてね・・・ああ、お姉ちゃん、いいひとと巡り合えたんだなって、そのとき思ったの・・・でもね、まさかあんなことになるなんて・・・」

狭山さんはそこで言葉を区切ると、当時のことを思い返すように少しの間黙った。僕も何を話したらいいのかわからなかったので黙っていた。

訪れた沈黙のなかを、カーステレオから流れくる女の人の透明な

歌声が、まるで波打ち際に打ち寄せた海のように静かに満たしていた。僕は窓の外に視線を向けると、その流れてくる音楽に耳を傾けながら、狭山さんのお姉さんが失ってしまったもののことや、そのときの狭山さんの気持ちを考えた。

「・・・どうして。」

だいぶ経ってから、狭山さんはふいに口を開くと言った。

僕は窓の外に向けていた視線を再び狭山さんの横顔に戻した。

「・・・どうして今度はお姉ちゃんが病気ならなくちゃいけないの。」

狭山さんは呟くような声で言った。それは僕に向かって話しかけているというよりも、ただ心に思ったことをそのまま口にただけのように感じられた。

「・・・お姉ちゃん、あのひとが死んだとき、すごく哀しんだのに、ほんとにほんとに哀しんでやっとな・・・それなのにどうして今度はお姉ちゃんが病気ならなくちゃいけないの。」

狭山さんはほんの少し感情的な口調になって言った。

「だって、お姉ちゃん、あんなに哀しい思いをしたんだから、もっと幸せになれてもいいはずでしょ。それなのにどうして・・・。」
狭山さんの科白は最後の方、ほとんど泣き出しそうな声に変わっていた。

僕は狭山さんの言葉に何か答えなきゃ、何か言わなきゃと思ったけれど、でも、結局、僕は何も言葉を見つけることができなかった。

狭山さんは車を道端の隅に寄せて停車させると、顔を両手で覆う

ようして泣いた。僕はなんとか彼女を慰めてあげたいと思ったけれど、こんなとき、何をどうしたらいいのかわからなかった。僕は声を殺して泣いている彼女の横顔をただ見つめていることしかできなかった。僕は自分の無力さを情けなく感じた。

さっきまで流れていた音楽はいつの間にか聞こえなくなっていた。

いくらか長い沈黙のあとで狭山さんは顔を覆っていた両手をどけると、その細い、きれいな指先で涙を拭いながら、

「・・・ごめん。」

と、掠れた小さな声で謝った。

「突然変なこと言い出して。」

僕は彼女の言葉に軽く首を振ってそんなことないよと答えた。

「こんなこと話すつもりじゃなかったんだけど・・・それに泣いちゃったりして・・・わたしバカみたいにだよ。ほんとにごめん。」

と、狭山さんは僕の顔に視線を向けると、取り繕うように小さく笑って言った。

僕は誰にでも泣きたいときはあると思うし、泣きたいときは思い切り泣いちゃったほうがいいよと言った。

狭山さんは僕の言葉に目元で微かに微笑むと、小さな声でありがとうと言った。

それから、狭山さんは僕の座っている助手席の窓に目を向けると、「見えないね。全然。曇ってるせいで。」

と、いくらか唐突に言った。

「見えない？」

僕は狭山さんの言った言葉の意味がわからなくて訊き返した。すると、狭山さんは可笑しそうに少し口元を綻ばせて、

「夕暮れの光。」

と、穏やかな口調で言った。

僕は振り向いて窓の外に目を向けてみた。すると、そこにはどんなよりとした灰色の空が見えた。もうとつくの昔に夕暮れの光が広がっていてもおかしくないはずなのに、ただ空には灰色の色素がぼんやりと広がっているだけだった。

「このまま夜になっちゃうのかな。」

と、狭山さんは窓の外に視線を向けたまま残念そうに言った。

「そうかもね。」

と、僕は少し考えてから答えた。

「わたし、お姉ちゃんのお見舞いにいったあと、こっやって海岸線の道に車を停めてひとりで夕暮れの空を見るのが空きだったのにな。」

と、狭山さんは窓の外に視線を向けたままそう冗談めかして言うとき、小さく笑った。それに知られるようにして僕も少し笑った。

窓を開けてみると、海の匂いが感じられた。それから微かに潮騒の響きも聞こえた。窓の外には防波堤があつて、その向こう側には砂浜と海が見えた。

狭山さんがちょっと海を見ていかない？ と言って、僕はいいねと答えた。

僕たちは車から降りると、防波堤を乗り越えて海の方まで歩いていった。

遊泳禁止の海なので浜辺には誰もいなかった。浜辺にはいつ死ん

だのか、亀の白骨化した死体があった。でも、それはあまり不気味だという感じはしなくて、ただいつかは失われてしまう命の儚さのようなものを感じただけだった。

目の前に広がる海は何日か前に降った雨のせいでいつもよりも荒々しかった。波打ち際には打ち上げられた海草や、流木などがたくさんあった。

繰り返す波の音はじつと聞いていると、恐ろしいようでもあり、懐かしいようでもあった。海のずっと遠くの向こうには一隻の船が浮かんでいるのが見えた。それはとても小さな漁船のように見えただけで、もしかすると、巨大なタンカー船か何かなのかもしれない。

狭山さんはしばらくの間波打ち際付近に立って、何か自分の思考のなかに沈みこんでいる様子でいたけれど、やがて振り向いて僕の顔を見ると、

「吉田くんは明日東京に戻っちゃうんだよね？」

と、唐突に訊いて来た。

「うん。」

と、僕は頷いた。

「明日の十時四十分の飛行機で東京に戻るよ。」

と、僕は答えた。

「そっか。」

と、狭山さんは僕の言葉に頷くと、

「寂しくなるね。」

と、言った。

そうだね、と、僕は言った。

「東京に戻つてもときどきメールちょうだいね。」

と、狭山さんは微かに目元で微笑んで言った。

「ほら、お姉ちゃんに小説見せるっていう約束もしたし。」

「そうだね。」

と、僕は苦笑するように微笑して頷いた。

「楽しみだな。吉田くんの小説。」

と、狭山さんは冗談めかして言った。

「あんまり期待されても困るけど。」

と、僕は苦笑いして言った。

それから少しの沈黙があつて、僕も狭山さんも黙つて目の前に広がる海を見つめていた。たくさん潮騒の響きと、風の音が通り過ぎて行つた。そしてそれらの音を重ね合わせようにして聞いていると、それはどうしてか誰かの哀し気な歌声を聞いているようにも感じられた。

いくらか長い沈黙のあとで狭山さんは口を開いて何か言った。

「なに？」

僕は狭山さん言った言葉がよく聞き取れなかったので訊き返した。すると、狭山さんは苦笑するように口元を綻ばせて、なんでもないと軽く首を振つた。そして微笑んでもう帰ろうかと狭山さんは言った。そうだねと僕は頷いた。

狭山さんは僕に背を向けると、ゆつくりと歩き出した。僕はそんな狭山さんの少し後ろを後れて歩いた。狭山さんの背中あたりまである髪の毛が風に吹かれて時折寂しそうに揺れた。

「花。」

と、狭山さんは突然立ち止まると、足元の地面を指差して言った。なんだろうと思って狭山さんの指差している地面のあたりを見てみると、そこには名前の知らない花がいくつかが咲いていた。それは、小さな、白い、きれいな草の花だった。その花は海から吹き付けてくる強い風に震えながら、そつと静かに咲いていた。

僕にできること

狭山さんのお姉さんが予言した通り、翌日は晴れになった。空には巨大な入道雲がもくもく広がっていて、それは僕の好きな、ほんとうに夏らしい空だった。

父親と母親は仕事の関係で出かけることができなかったので、飛行場までは妹の運転する車に乗っていった。

飛行場について車から降りると、涼しい風が吹きすぎていった。空港に植えられている木々の葉が風に揺れて、その風に揺れる木々の静かなざわめき聞いていると、もう夏も終わりなんだな、と、改めて実感した。

空港のロビーでチェックインを済ませると、まだ搭乗時間までには間があったので、僕たちは空港内にあるレストランで食事をとることにした。

まだ比較的朝の早い時間なのでレストランは空いていて、僕と妹の二人はウェイトレスの女の子に窓際の席に案内されて、向かい合わせに腰を下ろした。

レストランの大きな窓からは、これから空に向かって飛び立とうとしている飛行機や、今まさに着陸しようとしている飛行機の姿を目にすることができた。

程なくして注文を取りに来たウェイトレスに僕はラーメンとチャーハンのセットを注文し、妹はカツカレーを注文した。

注文した料理はすぐに運ばれてきて、僕たちはどちらかというと

口数少なくその運ばれてきた料理を食べた。

「夏も終わりやね。」

と、妹は料理を食べ終わると、お冷の入ったグラスを口元に運びながら、窓の外に視線を向けて独り言を言うように言った。僕も妹と同じように窓の外に視線を向けて、

「そうだね。」

と、同意した。

「わたし、夏が終わってしまうと思うといつも寂しい気持ちになるっちゃわ。」

と、妹は笑って言った。

「わかる気がするけど。」

と、僕は妹の言葉に軽く笑って答えた。

少しの沈黙があつて、僕は窓の外の景色に視線を向けたまま、テーブルの上のお冷を取って一口飲んだ。

「・・・なんかどんどん変わっていつてしまうがね。」

と、しばらくの沈黙のあとで妹が口を開いてポツリと言った。

僕は手にしていたお冷のグラスをテーブルの上に置くと、妹の顔に視線を戻した。

「だってよ、ほんの何年か前まではよ、わたしが車を運転して空港に来て、こうして兄ちゃんとかふたりでご飯食べるなんて考えられんことやったわ。でも、今ではそれが当たり前のことになっちゃかいね。それと思うと、不思議な気持ちになるね。」

「そういえばそうだよね。」

と、僕は笑って答えた。確かにほんの何年か前まで、兄妹ふたりだけで空港に来ることなんてまず考えられないことだった。ほんの僅かな時間の間に、ずいぶん色んなことが変わってしまったんだなと、僕はふと感じた。そしてこれからもどんどん変わっていつてし

まうのだろうと思った。

「兄ちゃんは今からどんげすって？」

と、妹はいくらか唐突に聞いてきた。

「どうするって？」

と、僕が訊きかえすと、

「まだしばらくは小説書いていくっちゃろ？」

と、妹は続けて言った。

「・・・うん。どうだろね。」

と、僕は軽く眼差しを伏せて、曖昧な答え方をした。僕の心のかでまた僕自身の弱さが身動きするのが感じられた。

今朝、空港に向かって出発する際に、父親と母親にそろそろ将来のことを真剣に考えたほうがいいんじゃないかといわれたことが、いくらか重く思い出された。確かに父親と母親の言葉にも一理あった。

「・・・わたしはもうちょっと頑張って欲しいと思うけんね。」

と、妹は静かな口調で言った。

「せっかくここまで続けてきたっちゃかいよ、自分が納得いくまでやった方がいいと思うけんね。」

と、妹は僕のことを励まそうとしてくれているのか、そんなことを言ってくれた。

僕は妹の言葉を否定も肯定もせずに、ただありがとと小さく笑って答えた。

飛行機が空に飛び立っていく大きな音が窓の外に聞こえた。

妹とは手荷物検査の列に並んだところで別れた。妹はこれから地元の町に戻ったあと、友達と出かける予定があるようだった。

妹がバイバイと手を振って、僕もバイバイと小さく手を振った。

手荷物検査を終えて空港の発ロビー内に入ると、僕は適当に空いている席を見つけて腰を降ろした。出発時間まではまだ二十分以上もあった。

ロビー内は出張か何かでこれから出かけると思われるスーツ姿の男ひとや、子供連れの若い男女の夫婦の姿や、老夫婦や、旅行帰りと思われる、よく日焼けたした大学生ぽいひとたちの集団や、とにかく色んなひとたちがいた。そしてそれらのひとたちはみんな楽しそう笑ったり、喋ったり、あるいは忙しそうに携帯電話で誰かと話をしたりしていた。

僕だけが、ひとりぼっちで、特に何もやることもなくいるような気がした。

僕は飛行機に乗る前にケータイ電話の電源を切っておかなきゃと思って、ケータイ電話を鞆のなかから取り出した。そして電源を切るうとしたところで、ケータイ電話に二件のメールが届いていることに気がついた。バイブの状態にしておいたので全然気がつかなかったのだ。ひとつは大久保からのもので、もうひとつは狭山さんからのものだった。

大久保はメールのなかで、この前は久しぶりに色々話ができて楽

しかつたと書いていた。そしてお互い色々大変だけど頑張ろうと書いていた。

僕はその大久保のメールに対して、こっちも久しぶりに色々話せて楽しかった、大久保のおかげで前向きな気持ちになることができたとありがとうと書き、また今度宮崎に帰ってきたときはぜひ会いましょうと文章を続けてメールを送信した。

狭山さんはメールのなかで、まず昨日突然泣き出したりしてしまつてごめんと謝つていた。あのときは頭のなかが少し混乱してしまつていて、それで自分でも思いがけず泣いてしまったのだ、と、狭山さんはメールのなかで書いていた。

それから、狭山さんはお姉ちゃんのお見舞いに付き合つてくれてほんとに感謝していると続けた。お姉ちゃんも吉田くんに会えてすごく喜んでいたみたいだから、と。

最後、狭山さんはこういう文章でメールを締めくくつていた。

生きていると、思い通りにいかないことや、上手くいかないことがたくさんあつて、ときどき哀しくなつて、全てを投げたしてしまいたくなるときがあります。でも、そういうとき、わたしは楽しかったことや、いつも側にいて励ましてくれる大切なひとたちのことを思い浮かべることにしています。

そうすると、少しだけ、そんな感情がやわらぐ気がするからです。吉田くんも何か嫌なことがあつたり、自信がなくなつてしまひそうなときは、そうするといひんじやないかなつて思ひます。

きつと信じて頑張つていれば必ず良い結果が得られるはずだとわ

たしは思います。あるいはこれはきれいごとにすぎないのかもしれないけど、でも、それを否定してしまったら何もはじまらないと思うし、もし仮にいい結果が得られなかったとしても、とらえようによつてはその上手いかなかったことさえも、わたしたちのこの長い人生においては何かの役に立つんじゃないかなって思います。

これは誰かの受け売りだけど、人生に無駄なことなんてひとつもないと思います。少なくともわたしはその言葉を信じたいと思っています。

わたしはいま昨日車のなかで聞いていたエミリー・ロレンスの歌を聴いています。彼女の歌声を聞いていると心が落ち着く気がします。そしてわたしも心のなかに想像の花を咲かせようと思います。

ケータイのメールなのにすごく長くなってしまつてごめんなさい。P.S、吉田くんの小説、わたしもお姉ちゃんもすごく楽しみにしています。では。

僕は狭山さんのメールを二度読み返してから、ケータイ電話の電源を落として鞆のなかにしまった。僕の乗る飛行機の搭乗案内がはじまつていて、そろそろ搭乗口にいかなければならなかった。狭山さんにはまた東京についてから改めてメールを送ろうと思った。狭山さんには僕の方からも色々伝えたいことや、感謝したいことがたくさんあった。そして狭山さんのメールは、単純に僕の心を暖めてもくれた。

平日のせいなのか、飛行機それほど混雑していなかった。

僕の席は通路側の席だった。

僕の席から一個あけた、窓際の席に座ったのは、僕と同一年くらいの子だった。彼女はどことなく狭山さんに似ていた。一瞬、ほんとにとなりに狭山さんが座ったのかと思っただけだった。彼女の横顔は、どことなく寂しそうに映った。気を緩めると、とたんに溢れだしてしまいそうになる悲しみの感情を、彼女は必死になつて気持ちの内側に押しとどめようとしているみたいに見える。

間もなくして飛行機は乗客全員を乗せたことを確認するとゆっくりと動き出し、滑走路に入ると、やがて空に飛び立った。

飛行機が空に飛び立つてしまうと、僕はなんとなく窓の外の子が気になってちらりと窓の方に視線を向けてみた。そしてその際に、となり座っている女の子の様子も一緒に視界にはいった。

彼女は顔を心持窓の方にもたせかけるようにして、目を閉じていた。それは眠くて目をとじているというよりも、何かが通り過ぎていくのをじっと我慢しているみたいに見えた。

僕は視線をもとに戻すと、ここ一週間ばかりの、実家に帰ってきてからの日々のことを思い返してみた。妹と交わした会話や、大久保と話したこと。それから、狭山さんのお姉さんに会ったこと、そしてその帰りに狭山さんが僕に話したこと。

しばらくしてから機長の簡単な挨拶があり、そのあとで機長は東京に着くのは一時間四十分後で、東京は現在雨が降っていると告げた。天候の関係で、東京に近づくにつれて多少揺れることが予想されているが、揺れても飛行に影響はないので安心して欲しいと機

長は告げた。

機長のアナウンスが終わると、東京は雨が降っているんだ、と、なんとなく僕は思った。折りたたみの傘を準備してこなかったことが少し悔やまれた。

特にやることもないので僕は目を閉じて眠ろうとしたのだけけれど、変に気が高ぶってしまってなかなか寝付くことができなかった。

僕は諦めて起きていることにした。そして狭山さんは今頃何をしているのだろうと僕は考えた。もしかすると今頃狭山さんはお姉さんの入院している病院にお見舞いに行っているのかもしれないと僕は想像した。

今見えている視界のなかに重なるように、狭山さんと狭山さんのお姉さんが楽しそうに談笑している映像がふうと浮かんですぐに消えた。

僕は狭山さんのお姉さんがこのまま何事もなく無事回復することを祈わずにはいらなかった。お姉さんは最愛のひとを事故で失ってしまったている。それがこのうえ、彼女自身が病気で死んでしまうとしたら、それはあまりにもひどすぎると僕は思った。

そしてもしお姉さんが死んでしまったとしたら、その哀しみに狭山さんはきつと耐えられないだろうと僕は思った。

僕は彼女たちのために何かしたいと思った。でも、僕が彼女たちのために何かしてあげることなんて何もないように思えた。でも、しばらく考えていくうちに、もしかしたら、小説を書くことくらいだったらできるかもしれないと僕は思いついた。

僕が彼女たちのためにしてあげられることなんてほとんど何もなければ、でも、彼女たちに喜んでもらえるような小説を書くことくらいだったら、なんとかできるかもしれないと思った。

僕は彼女たちのために小説を書くことと決意した。その小説を読むことで彼女たちが少しでも励まされたり、前向きな気持ちになることができる小説。たとえば、昨日、海辺に咲いていた、小さな、白い、美しい花のような。

僕はふと気になってとなり座っている女の子の方にちらりと視線を向けてみた。彼女はさっき同じようにどちらかというときと哀しそうに瞳を閉じたままだった。

僕はいつか書けるようになりたいと思った。いまとなりに目を閉じて眠っている女の子や、狭山さんや、そのお姉さんや、大久保や、妹や、そして僕自身に希望を与えることができるような小説が。

そのために必要なのはまず書き続けることだと僕は思った。そんな小説を書くことなんて永遠にできないのかもしれないけど、でも、まずは努力してみることだと僕は自分自身に言い聞かせた。

飛行機の窓の外には雲ばかりが見えた。気流が悪いところを飛行しているらしく、飛行機は時折小刻みに揺れた。

そのうち、これまでの細々とした、色んな疲れが押し寄せてきて僕は瞼が重くなるのを感じた。僕は目を閉じると少し眠ることにした。

目を覚ました頃にはきつと東京に着いているだろうと思った。雨の降る東京が僕のことを待っていると僕は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4067c/>

夏の終わりの静かな風

2010年10月18日09時20分発行